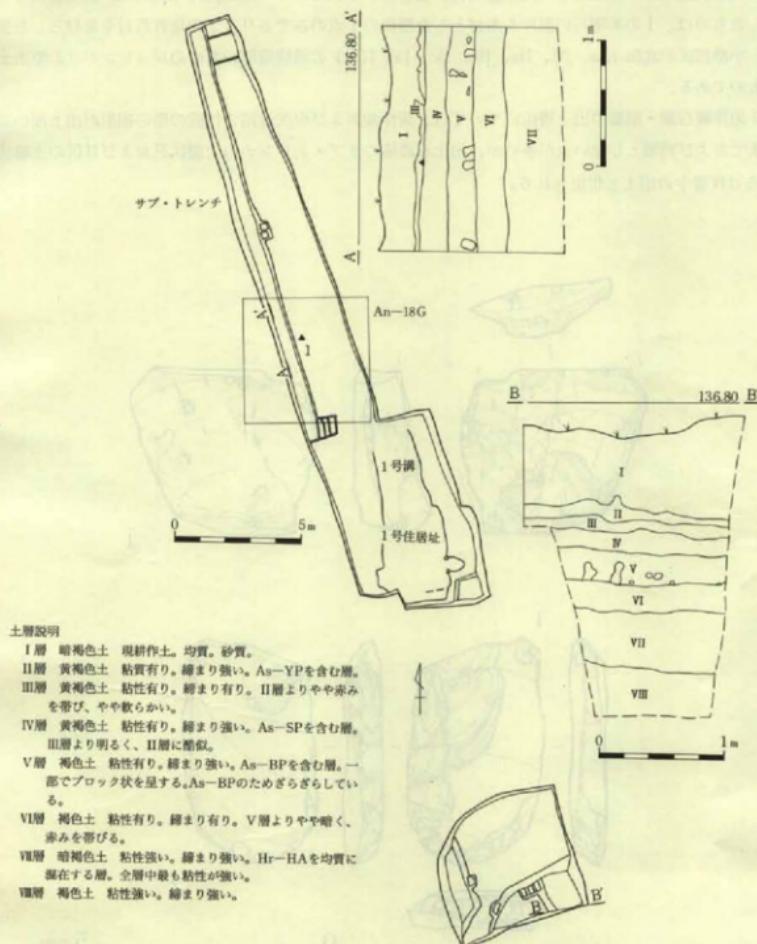


IV 検出した遺構と遺物

1. 先土器時代



第9図 先土器時代調査区全体図・土層状況断面図

IV 検出した遺構と遺物

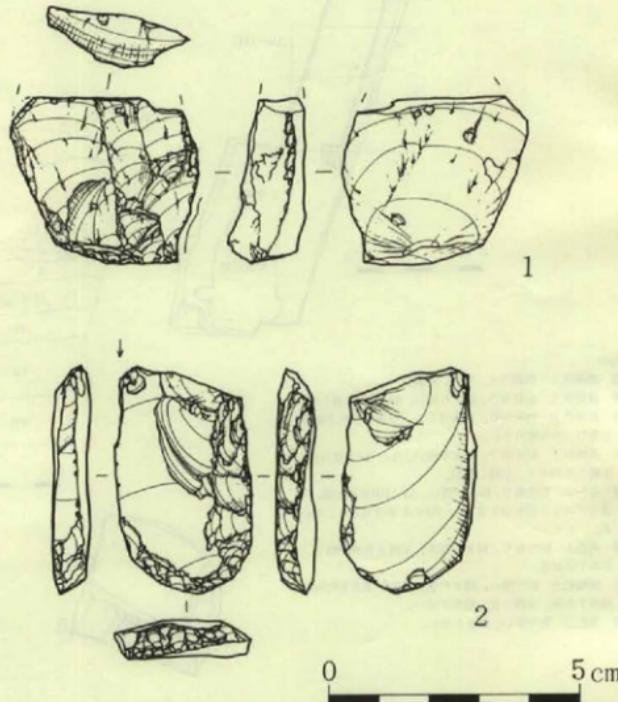
概要

小林遺跡は、相沢忠洋氏によって、発見・調査された三ツ屋遺跡と同一遺跡である。遺跡名称については、当該地区の小字名に従い小林遺跡と呼称した。

今回の調査地点は、相沢忠洋氏の調査地点西方の近接地であり、先土器時代の遺構・遺物の検出が期待され、また三ツ屋遺跡の西への広がりを確認する調査になった。

今回の調査によって出土した先土器時代の遺物は、2点である（第10図）。出土位置・出土層位の判然としたものは、1の黒曜石の剥片を素材とした削器の1点のみであり、2の珪質頁岩を素材とした搔器は、小林III区の北部（As, At, Ba, Bb, Bc-15～17G）の遺構確認のためのジョレンがけの際出土したものである。

1の黒曜石製・削器の出土層位については、耕作面および現況道路の付設の際の掘削が出土面の直上にまでおよび判然としない点が多いが、出土石器脇のサブ・トレーナーの土層状況およびII区の土層状況からはIV層中の出土と想定される。



第10図 先土器時代出土遺物

出土遺物（第10図、第1表、PL-3）

先土器時代の遺物は2点である。1はローム層中より検出され、2は表土からの採集品である。

1は黒曜石の剝片を素材とした削器で、素材となった剝片の左側縁部に微細な調整剝離が連続的におこなわれている。石器は下端部を欠損しているが、欠損面及びその周辺に微細な剝離痕が観察されることから、欠損した後も何らかのかたちで用いられたものと考えられる。石材となった黒曜石は直径1mm前後の球軸を夾雜物として多量に含んでおり、こうした点は過去に相沢忠洋氏によって調査された本遺跡（三ツ屋遺跡）の石器群の石材に用いられた石材と似ており、注意する必要がある。

2は珪質頁岩の剥片を縦に用いている搔器で、素材となった剥片の末端部には急角度な剥離を行い刃部を作出し、右側縁部には平坦な調整加工を行い石器の形態を整えている。なお、この搔器の左側縁部には桶状剥離とも見られる剥離痕が観察されるが、これは素材となった剥片にもともとあったもののか、桶状剥離によって作出された彫刀面なのか判断することは困難である。

2. 縄文時代

概要

今回の調査で、小林遺跡III区～山神遺跡I区にかけて、縄文時代中期の竪穴式住居址が8軒検出された。その他前期諸礎式期の土坑1基、中期土坑19基、縄文時代時期不明土坑21基が検出された。山神II区では、縄文早期条痕文系の土器および石器、礫・焼磧を2箇所において集中的に検出したが、遺構の存在は確認し得なかった。また、大畑遺跡では、縄文前期諸礎式期の土器を6箇所において集中的に検出したが、やはり遺構の存在は確認し得なかった。

なお、検出された遺物は、先の早期条痕文系の土器を最古期の資料として、後期堀ノ内式期の土器まで断続的ではあるが検出されている。

小林8号住居址（第11図、PL-4, 5）

本住居址は、小林III区のほぼ中央(B1, Bm-12, 13G)に位置する。本住居址の北には、11号住居址が、南には、10・15・16号住居址が近接し、縄文時代の住居址が集中する地域に位置する。

平面形態はやや歪な円形を呈し、規模は直径4.8mを測る。壁高は30～40cm。壁溝は無い。床面は、ほぼ平坦で全体的によく縮まっている。

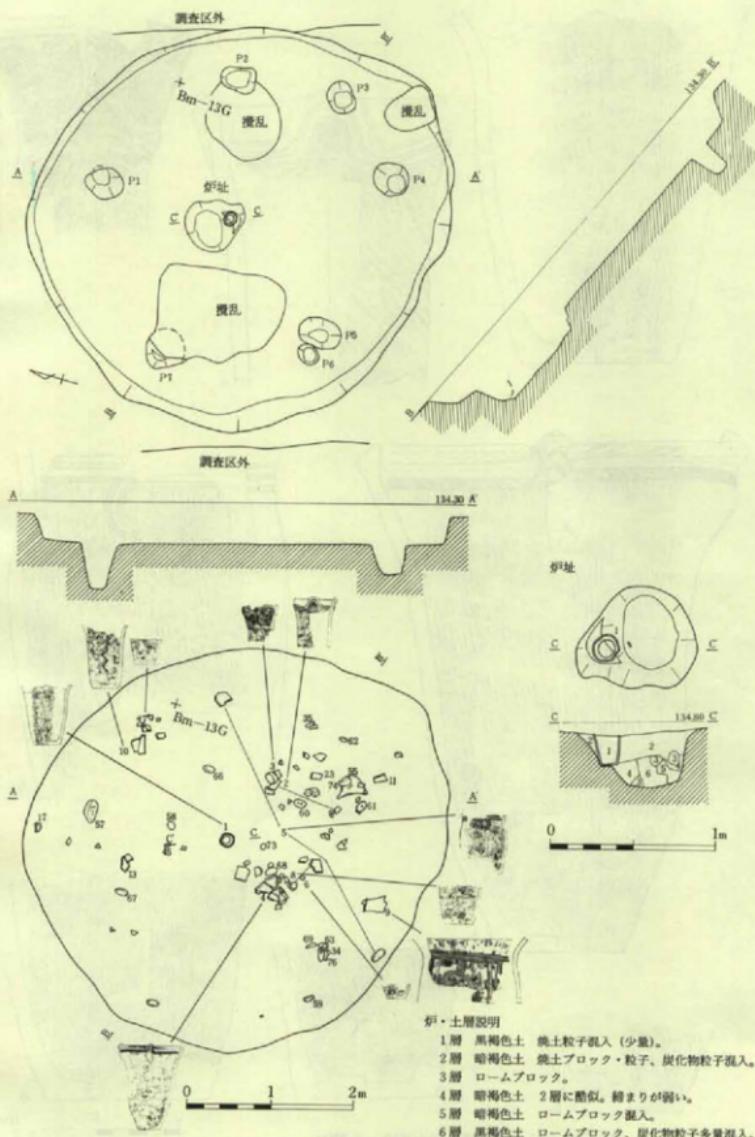
ピットは7本確認された。P1～P5, P7の6本が主柱穴で、その配置は壁から25～40cmの距離で並び、各柱穴間はP2-P3(0.7m), P3-P4(0.9m)が短いものの、他の柱穴間は、1.4～1.7mを測る。また、各柱穴の深度は、床面から36～54cmを測る。P6（深度12cm）は本住居址に伴うものとは考えにくい。P7は、攢乱によってその大部分を破壊されている。

炉址は、中央やや北寄りに検出され、炉体土器を炉址掘り方の南寄りに伴う埋甕炉である。炉体土器は口縁部及び口縁部文様帶を欠く深鉢である（第11図1）。平面形態は、玉子形を呈する。炉址及びその周辺の焼土の分布は散在的で、被熱の程度は低く、埋設された炉体土器にも、二次焼成の影響は見られない。

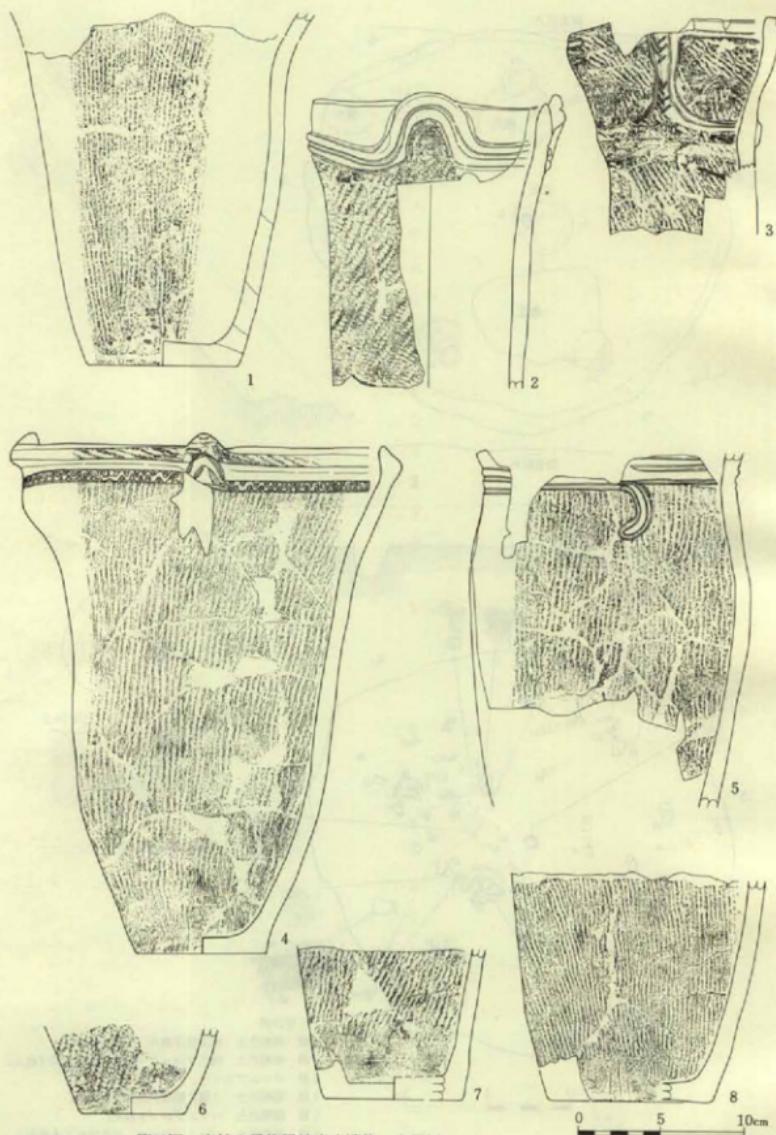
本住居址からの遺物出土の状況は、覆土上層からは完形個体の出土はなく、出土量も決して多いとは言えないものの、覆土中層から床面までは間断なく出土する。床面での遺物の出土は、炉址の南部から南東部にかけて集中する傾向を示すが、ほぼ全面に拡がると言ってよい。（攢乱によって、西部からの出土はない。）

小林8号住居址出土遺物・土器（第12～14図、第2表、PL-47, 48）

- 1は、炉体土器で口縁部を欠く深鉢。
- 2は、炉址南東部床面から出土した深鉢。
- 3は、2の東部から出土した深鉢。
- 4は、炉址の南西方42cmの位置で口縁部を北に向けて潰された状況で出土した。
- 5は、東部及び南部からの破片が接合した。口縁部及び底部を欠く深鉢。
- 6から8は、底部である。
- 9は、南部で出土した大型深鉢の破片。
- 10は、北部で出土した口縁部を欠く深鉢。



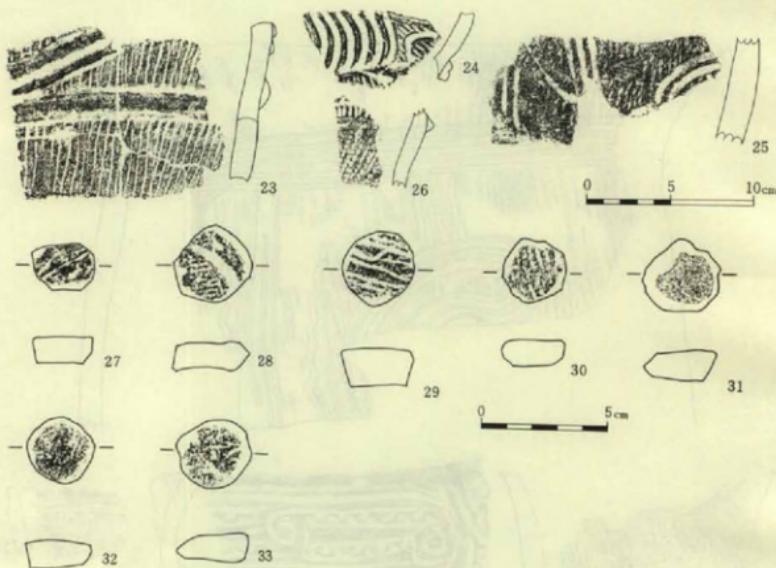
IV 検出した遺構と遺物



第12図 小林8号住居址出土遺物・土器(1)



第13図 小林8号住居址出土遺物・土器(2)



第14図 小林8号住居址出土遺物・土器(3)

11から21は口縁部破片資料。22から26は胴部破片資料である。

27から33は、土製円盤である。出土位置は、いずれも不明である（覆土中からの出土）。

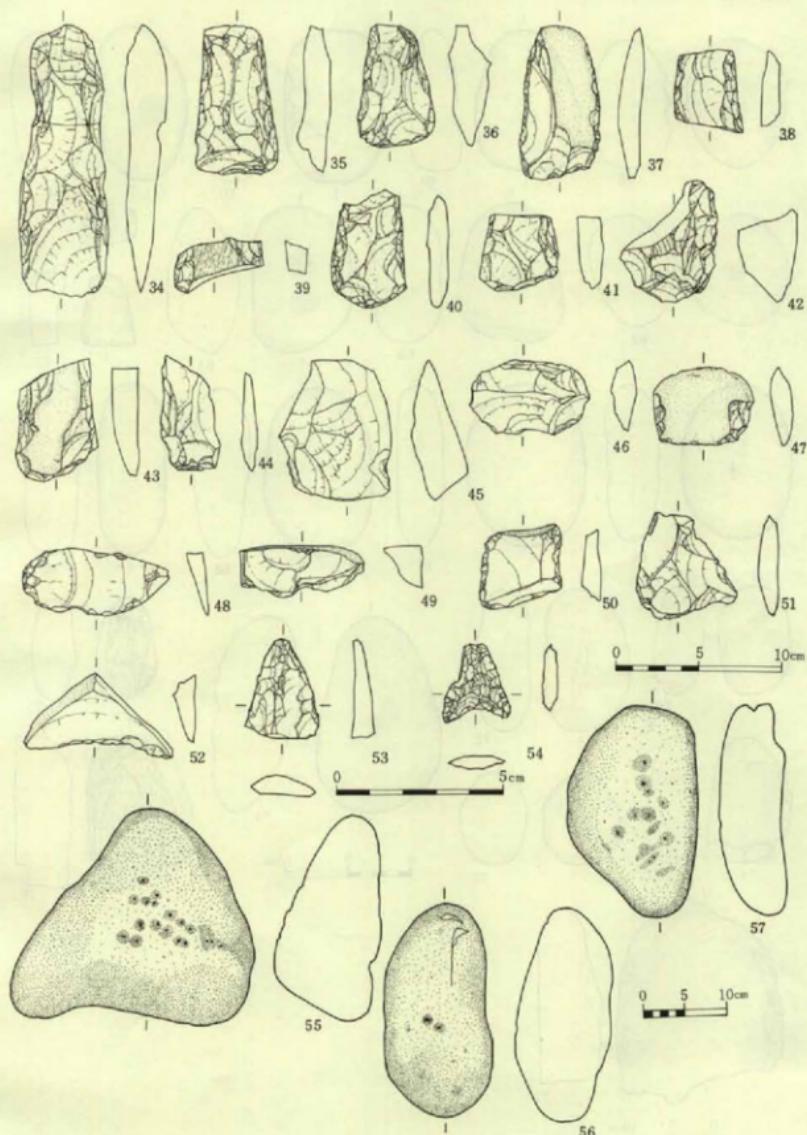
小林8号住居址出土遺物・石器（第15～16図、第3表、PL-49）

34から43は石斧で、いずれも打製である。

44から52・71は削器・搔器。

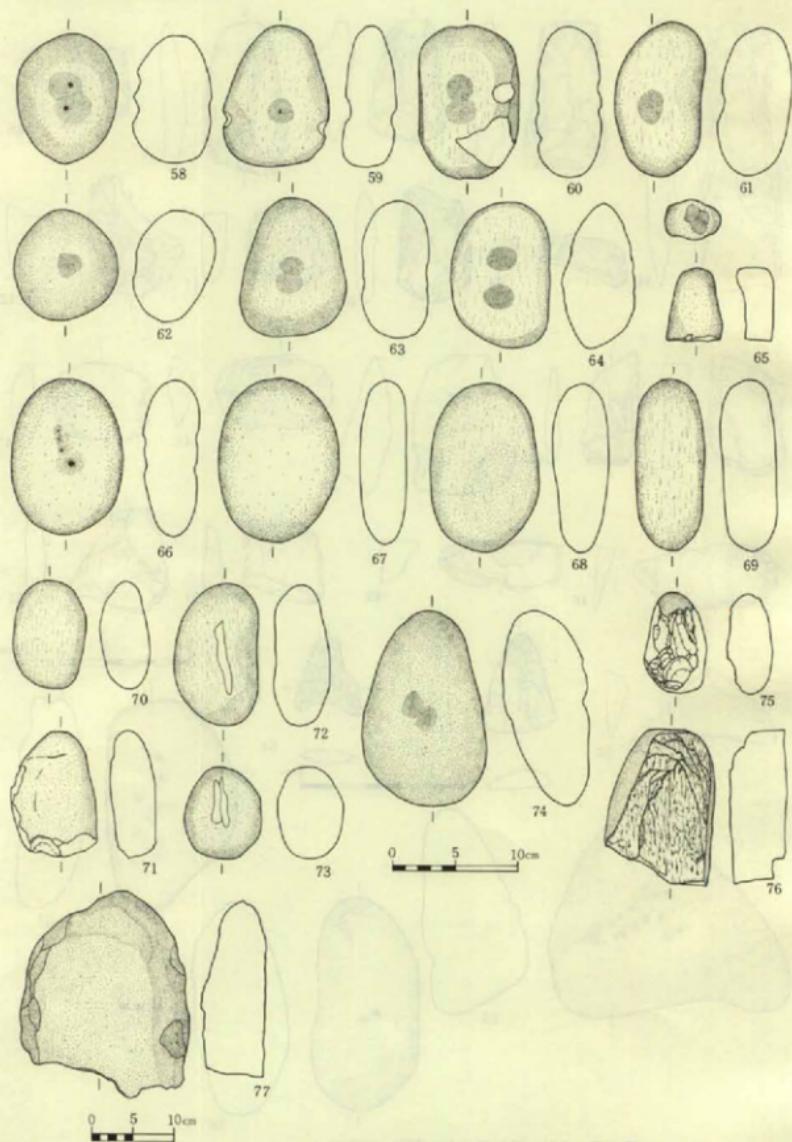
53・54は、石鎌。

55から57は、多孔石。58から70・72から74は磨石・凹石。75は敲打による複雑な剥離が確認できる礫器。76は台石。77は石皿。



第15図 小林8号住居址出土遺物・石器(1)

IV 検出した遺構と遺物



第16図 小林8号住居址出土遺物・石器(2)

小林10号住居址（第17図、PL-6）

本住居址は、小林III区の南部(Bm, Bn-12G)に位置し、16号住居址と重複する。新旧関係は、16号住居址から時期を比定できる遺物の出土がなかったものの、16号住居址を切っているところから、本住居址のほうが新しいものと推定できる。

平面形態は円形を呈するものと思われるが、大部分が調査区外に位置するためその規模等不明な点が多い。壁高20~30cm。床面は、ほぼ平坦で、全体的によく締まっている。柱穴は、P 1, P 2, P 5, P 6が本住居址に帰属するものと考えられる。炉址も、調査区内では確認できなかった。

本住居址からの遺物の出土は多くない。P 2の西に凹石(13)・礫が出土。P 4脇で縄文土器・深鉢の胴部から底部(1)、縄文土器・深鉢の底部(4)、P 6の東で縄文土器・浅鉢の口縁部から底部にかけての破片(5)が出土した以外は実測資料のほとんどが覆土中からの出土である。

小林10号住居址出土遺物（第18図、第4表、PL-50）

- 1は、縄文土器・深鉢の胴部から底部にかけての資料。
- 2は、縄文土器・深鉢の胴部破片。
- 3は、キャリバー型の縄文土器・深鉢の口唇部破片。
- 4は、縄文土器・深鉢の底部破片。
- 5は、無文の縄文土器・浅鉢の破片。
- 6から8は、打製石斧。
- 9・11・12は削器・搔器。
- 10は、棒状石器。
- 13・14は多孔石。

小林15号住居址（第17図、PL-7）

本住居址は、8号住居址の南(Bm, Bn-12, 13G)に位置し、16号住居址と重複する。16号住居址との新旧関係は、土層状況からは確認できず、また16号住居址からの時期比定資料としての遺物の出土がないことから判然としないが、16号住居址と重複し新しい10号住居址の出土遺物より、本住居址の出土遺物が新しい時期に比定できるところから、16号住居址より本住居址が新しいものと判断する。

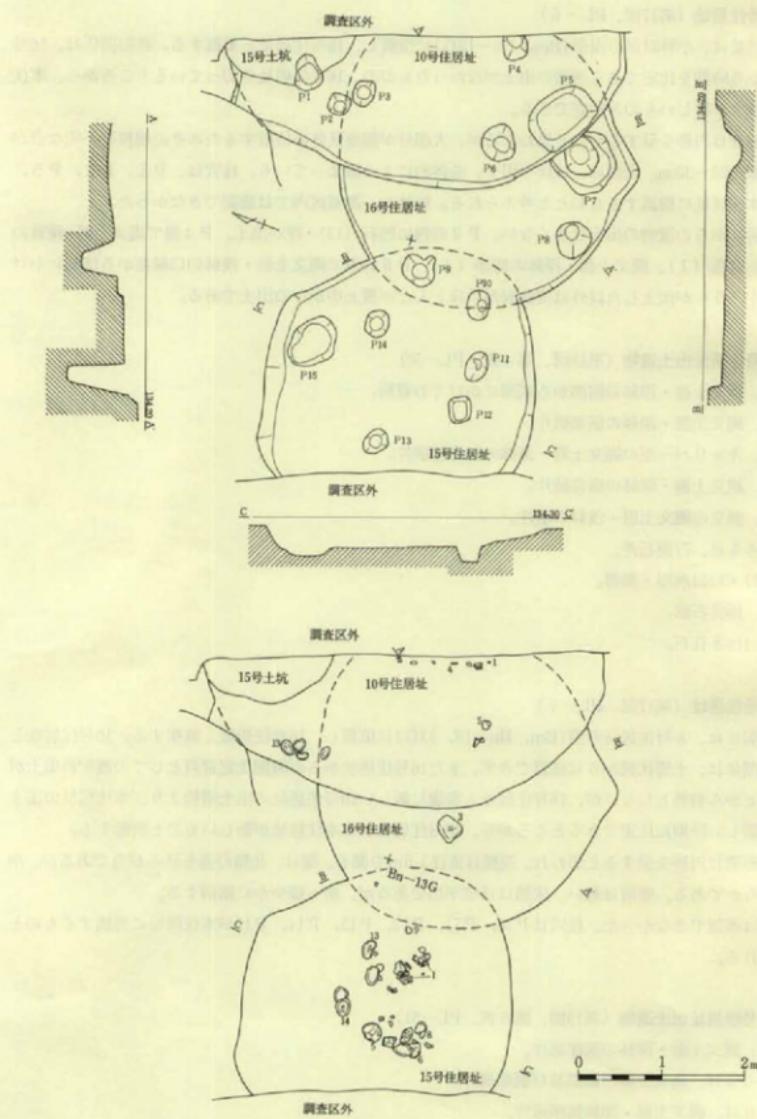
平面形態は円形を呈すると思われ、規模は直径3.5mを測る。壁は、北側の落ち込みが急であるが、南は、緩らかである。壁溝は無い。床面はほぼ平坦であるが、南へ緩やかに傾斜する。

炉址は確認できなかった。柱穴はP10, P11, P12, P13, P14, P15が本住居址に帰属するものと考えられる。

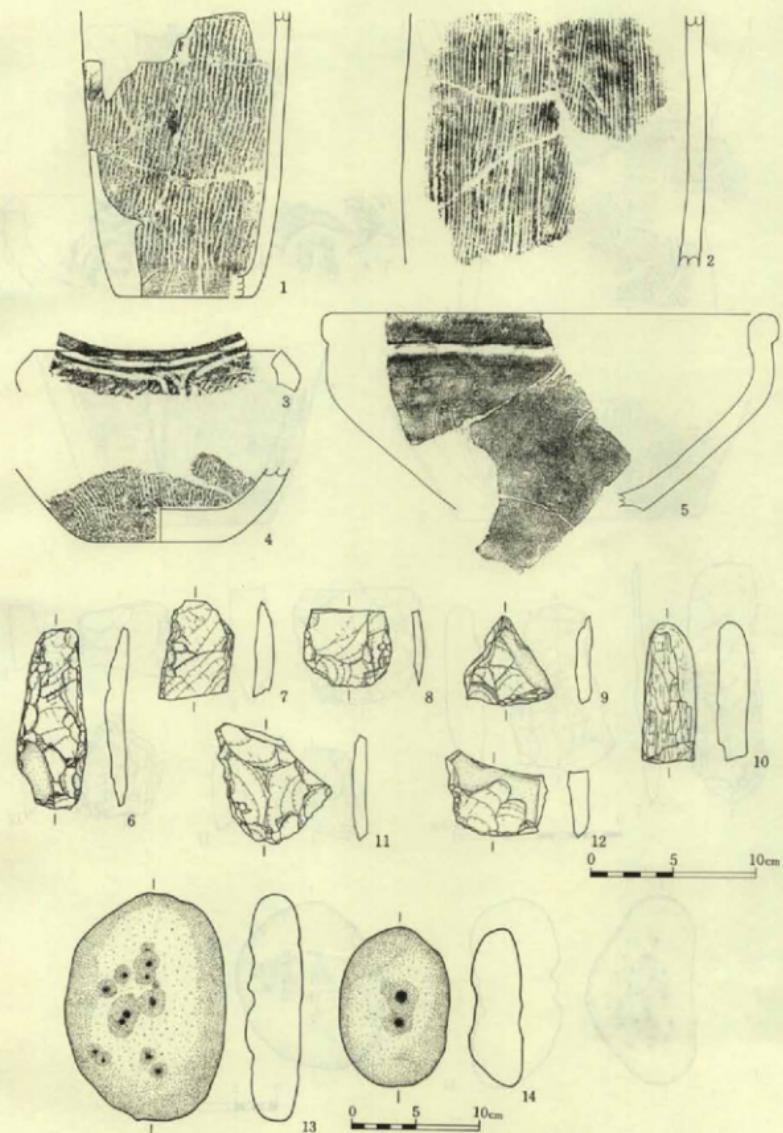
小林15号住居址出土遺物（第19図、第5表、PL-51）

- 1は、縄文土器・深鉢の胴部破片。
- 2から4は、縄文土器口縁部及び胴部破片。
- 5・6は、縄文土器・深鉢底部破片。
- 7から12は、打製石斧。
- 13・14は、多孔石。

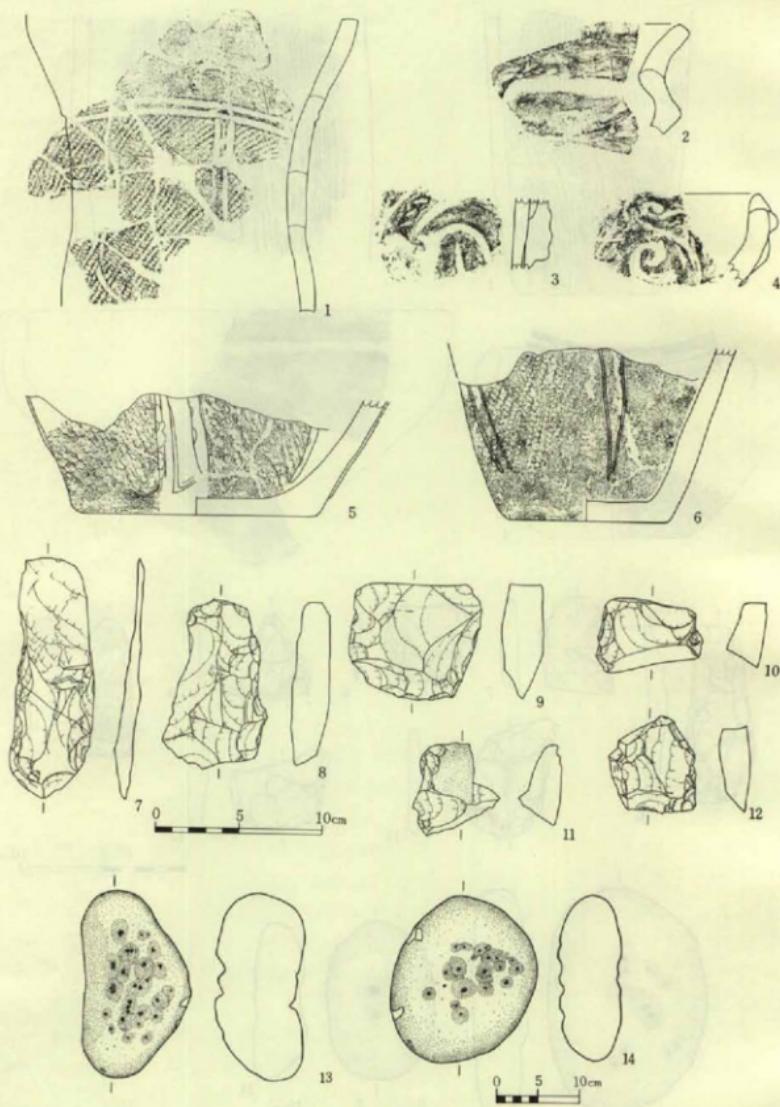
IV 検出した遺構と遺物



第17図 小林10・15・16号住居址



第18図 小林10号住居址出土遺物



第19図 小林15号住居址出土遺物

小林16号住居址（第17図、PL-6）

本住居址は、8号住居址の南（Bm, Bn-12, 13G）に位置し、10号住居址・15号住居址と重複する。新旧関係は、10号住居址に切られるところから10号住居址が本住居址より新しいことは判断できるが、15号住居址とは、本住居址からの時期比定可能資料の欠如から判然としない。

平面形態は東西に長い楕円形を呈すると思われ、規模は長径3.6m（推定）、短径3.3mを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり9.6～15.3cmを測る。壁溝は無い。床面はほぼ平坦である。柱穴は、P 3, P 4, P 7, P 8, P 9が本住居址に帰属するものと考えられる。炉址は、10号住居址に切られた部分に存在した可能性がある。

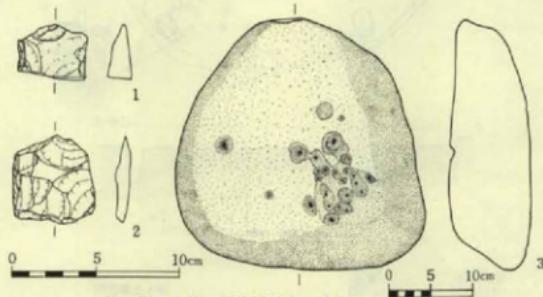
本住居址からの、遺物の出土は少ない。

小林16号住居址出土遺物（第20

図、第6表）

1・2は、打製石斧。

3は、多孔石。



第20図 小林16号住居址出土遺物

小林11号住居址（第21図、PL-8・9）

本住居址は、小林III区のほぼ中央（Bk, Bl-13, 14G）で検出された。本住居址は奈良時代住居址（小林7号住居址）調査の際、床面に炉址と思われる焼土の分布が認められたことと、壁面に縄文土器の出土があったことから、周辺を精査し確認されたものである。

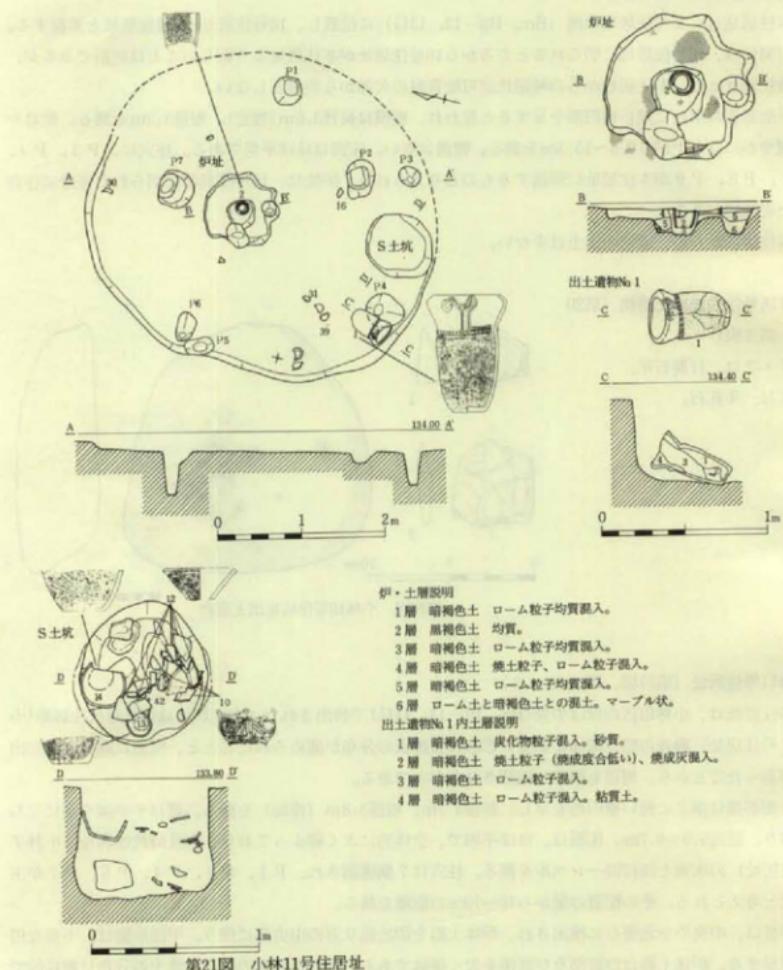
平面形態は南北に長い楕円形を呈し、長径4.2m、短径3.8m（推定）を測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高5.9～8.7cm。床面は、ほぼ平坦で、全体的によく締まっており、奈良時代住居址（小林7号住居址）の床面とほぼ同一レベルを測る。柱穴は7個確認され、P 1, P 2, P 4, P 6, P 7が主柱穴と考えられる。その配置は壁から10～70cmの距離を測る。

炉址は、中央や北寄りに検出され、炉体土器を炉址掘り方の中央部に伴う。平面形態は、不整な円形を呈する。炉体土器は口縁部及び底部を欠く深鉢である。炉址及びその周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址の南部に土坑1基が確認された。この土坑に貼床等なかったことから本住居址に伴うものと考えられる。平面形態は、円形を呈し、径87.0cmを測る。壁はやや袋状を呈し、壁高64.0～68.0cmを測る。この土坑からは多量の遺物の出土があり、覆土上面から坑底面まで間断なく出土している。

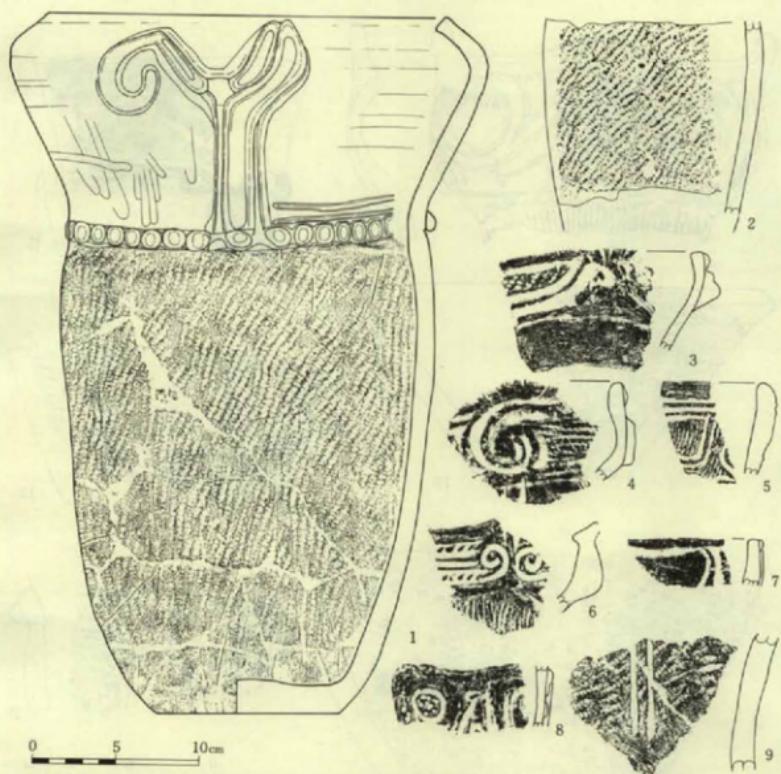
本住居址からの遺物出土状況は、南部壁よりから縄文土器・深鉢の完形個体の出土があった。出土量は多くない。

IV 検出した遺構と遺物



小林11号住居址出土遺物・土器 (第22図、第7表、PL-52)

- 1は、南部壁より出土した繩文土器・深鉢の完形個体である。
- 2は、炉体土器で、底部及び口縁部を欠いている。
- 3から7は繩文土器の口縁部破片資料。
- 8・9は、胴部破片資料。



第22図 小林11号住居址出土遺物・土器

小林11号住居址 S 土坑出土遺物・土器（第23図、第8表、PL—52, 53）

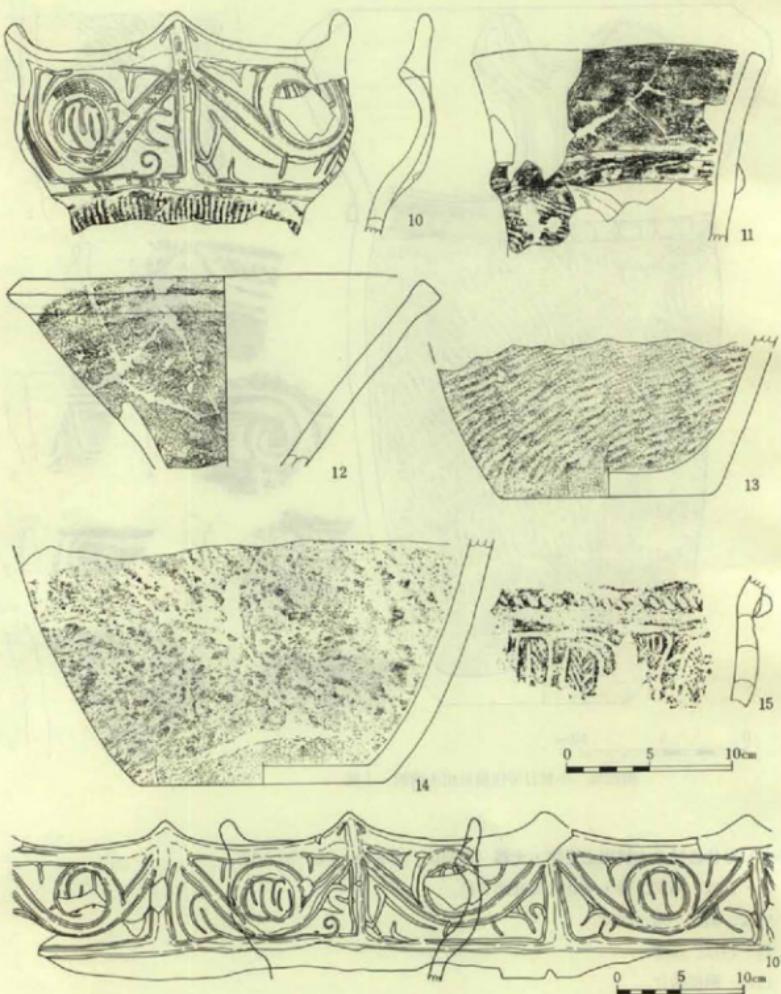
10・11は、繩文土器・深鉢の口縁部資料。

12は、繩文土器・浅鉢。

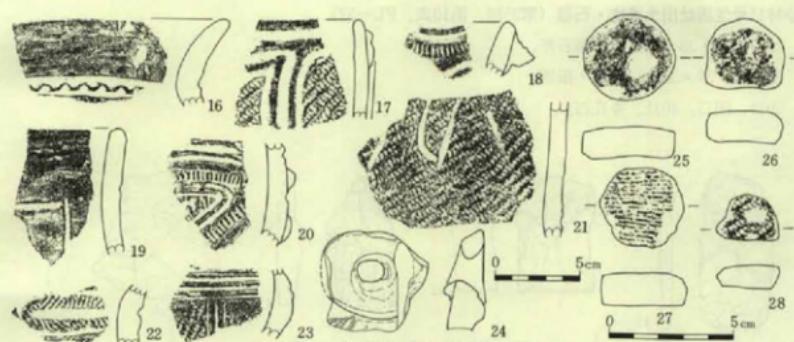
13・14は、底部。

15は、胴部破片。

IV 検出した遺構と遺物



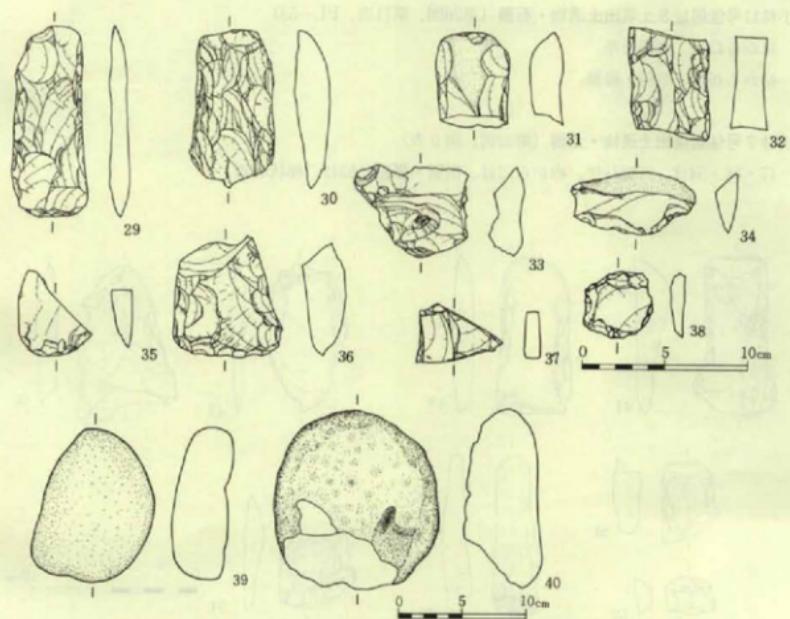
第23図 小林11号住居址S土坑出土遺物・土器



第24図 小林7号住居址出土遺物・土器

小林7号住居址出土遺物・土器（第22図、第9表）

11号住居址を切り構築された、奈良時代の7号住居址の覆土からは大量に縄文時代の遺物が出土している。破片資料が多いが参考までにこれらの遺物を図示しておく。



第25図 小林11号住居址出土遺物・石器

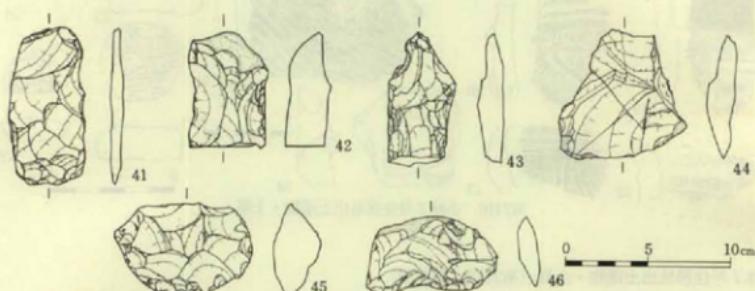
IV 検出した遺構と遺物

小林11号住居址出土遺物・石器（第25図、第10表、PL-52）

29から32・35・36は、打製石斧。

33・34・37・38は、削器・搔器。

39は、凹石。40は、多孔石。



第26図 小林11号住居址S土坑出土遺物・石器

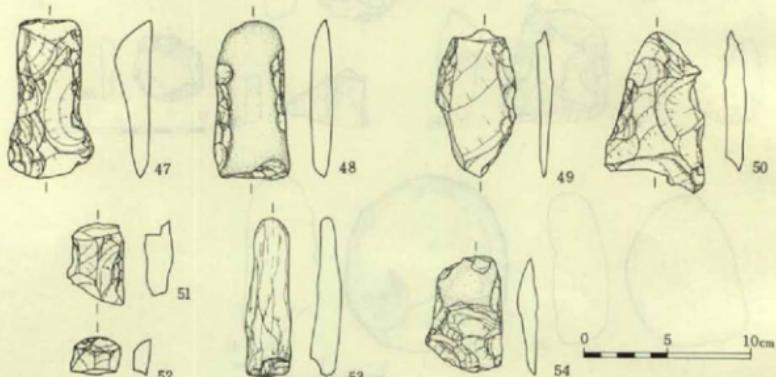
小林11号住居址S土坑出土遺物・石器（第26図、第11表、PL-53）

41から43は、打製石斧。

44から46は、削器・搔器。

小林7号住居址出土遺物・土器（第22図、第9表）

47・48・54は、打製石斧。49から52は、削器・搔器。53は、棒状石器。



第27図 小林7号住居址出土遺物・石器

小林14号住居址（第28図、PL-9）

本住居址は、小林IV区の南西部（Ca, Cb-10G）で検出された。

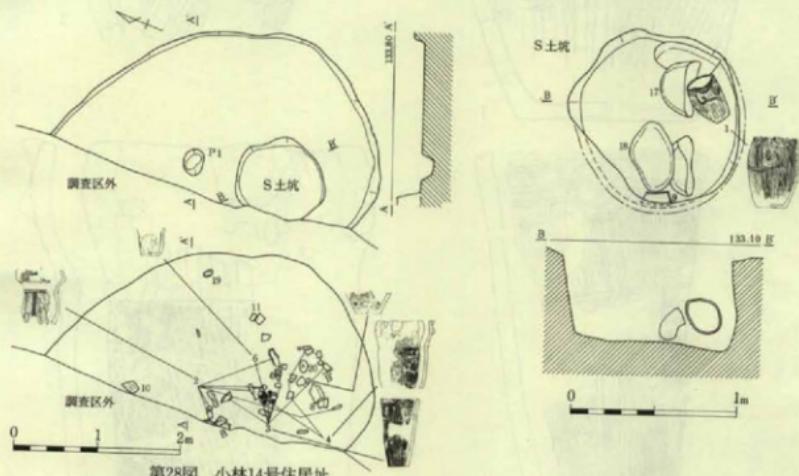
平面形態は楕円形を呈すると思われるが、西半部が調査区外に位置するため、その規模等不明な点が多い。柱穴・炉址は調査区内では確認されなかった。

床面は、ほぼ平坦で締まっている。

本住居址の南部に土坑1基が確認された。この土坑は、土坑内出土遺物と住居址内出土遺物に接合関係が認められることから、本住居址に伴うものと考えられる。

土坑の平面形態は、やや歪な円形を呈し、径108.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高65.0~74.0cmを測る。坑底面は東南に向かって傾斜する。

本住居址からの遺物出土状況は、土坑内及び土坑周辺に集中する傾向を呈する。

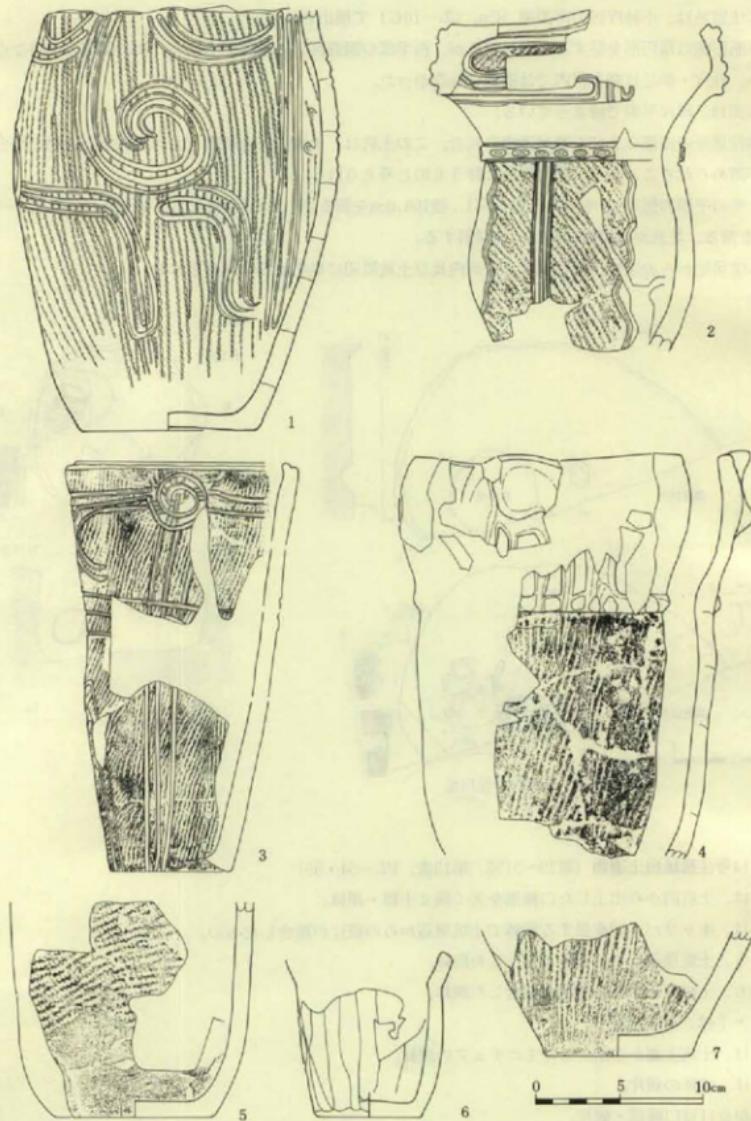


第28図 小林14号住居址

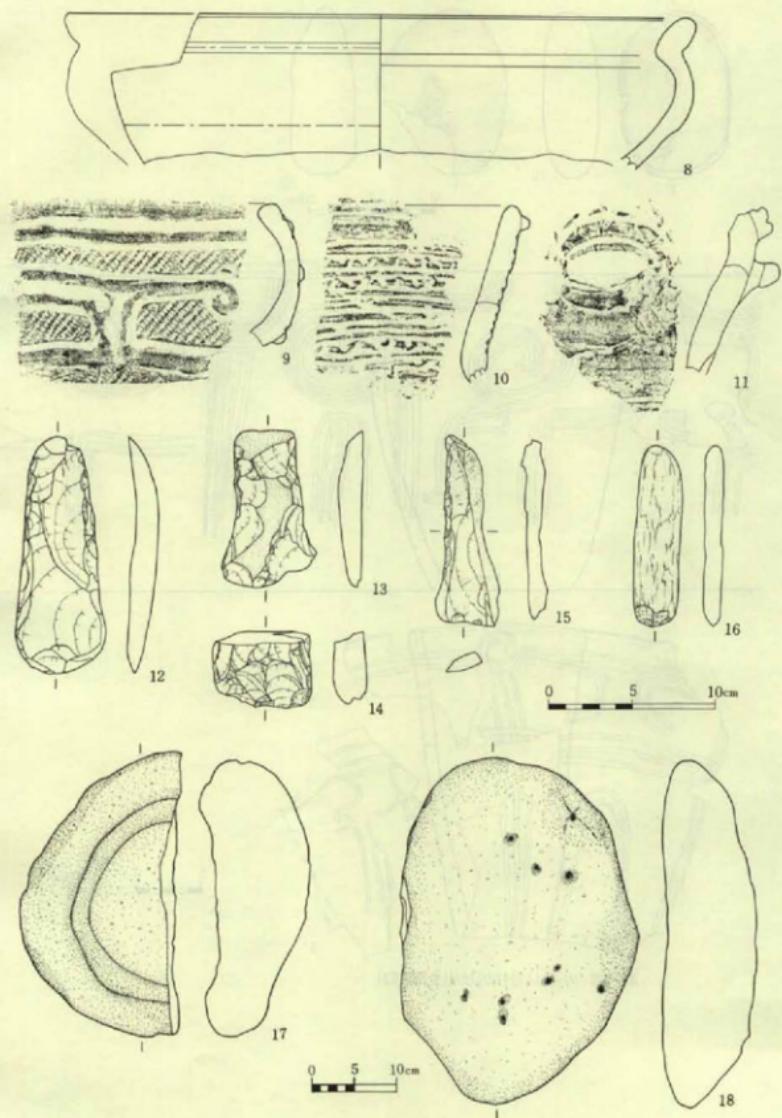
小林14号住居址出土遺物（第29~31図、第13表、PL-54・55）

- 1は、土坑内から出土した口縁部を欠く縄文土器・深鉢。
- 2は、キャリバー型を呈する深鉢で土坑周辺からの破片が接合したもの。
- 3も、土坑周辺からの破片が接合した深鉢。
- 4も、土坑周辺からの破片が接合した深鉢。
- 5・7は、深鉢・底部。
- 6は、土坑上面から出土したミニチュアの深鉢。
- 8は、浅鉢の破片。
- 9から11は口縁部・破片。
- 12から14は、打製石斧。
- 15は、削器。
- 16は、棒状石器。
- 17・18は石皿。

IV 検出した遺構と遺物

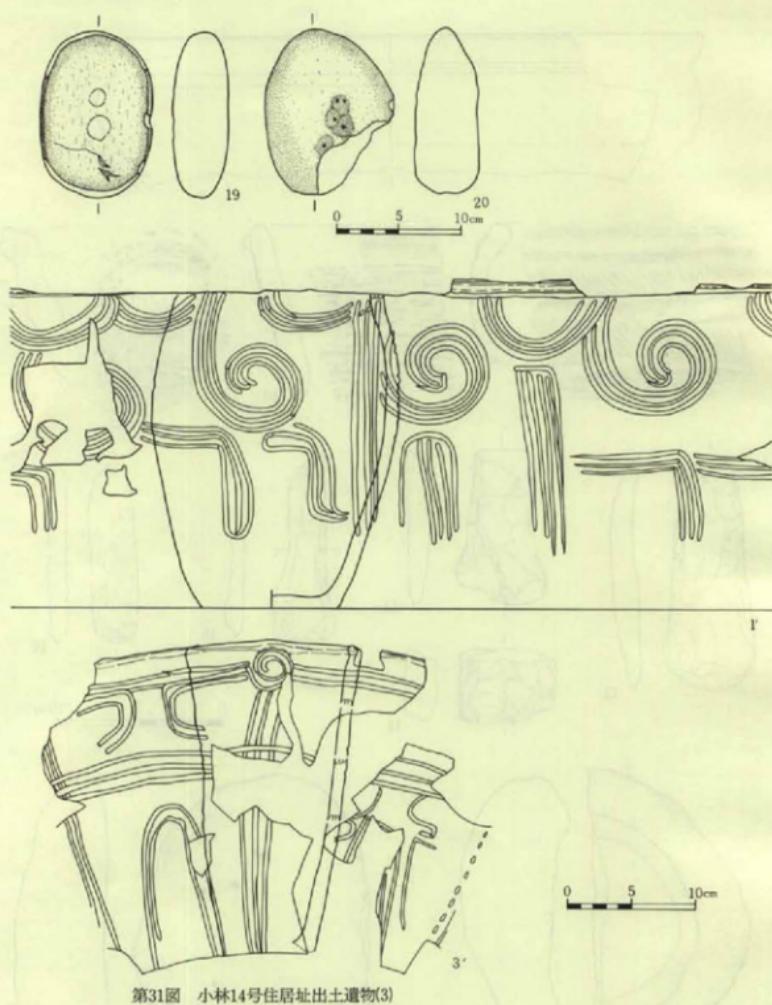


第29図 小林14号住居址出土遺物(1)



第30図 小林14号住居址出土遺物(2)

IV 検出した遺構と遺物



第31図 小林14号住居址出土遺物(3)

山神7号住居址

(第32図、PL-10)

本住居址は、山神I区の小林V区寄りの東部(Cf, Cg, Ch-19, 20G)で検出されたが、北西部は調査区外にある。平面形態は円形で、規模は直径4.7mを測る。壁高10.5~42.3cm。壁溝は無い。床面は、ほぼ平坦で全体的によく縮まっている。ピットは6個確認された。P1, P3, P5が主柱穴であると考えられるがその配置は不規則である。これらのピットの深度は、床面から20.1~40.6cmを測る。

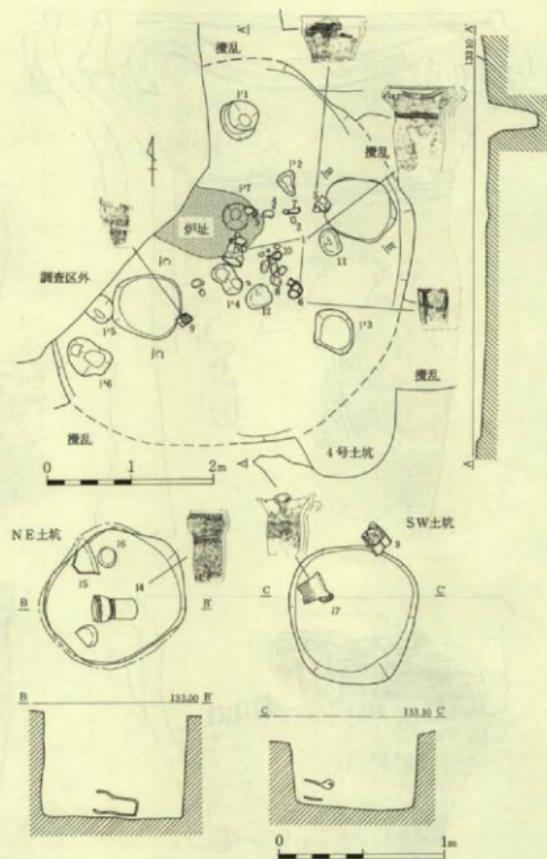
炉址は、中央やや北寄りに検出され、地床炉である。平面形態は、梢円形を呈する。炉址及びその周辺の被熱の程度は低い。

本住居址内の南西部及び北東部に土坑を検出した。

本住居址から遺物出土は炉址南東部に集中する傾向を示す。

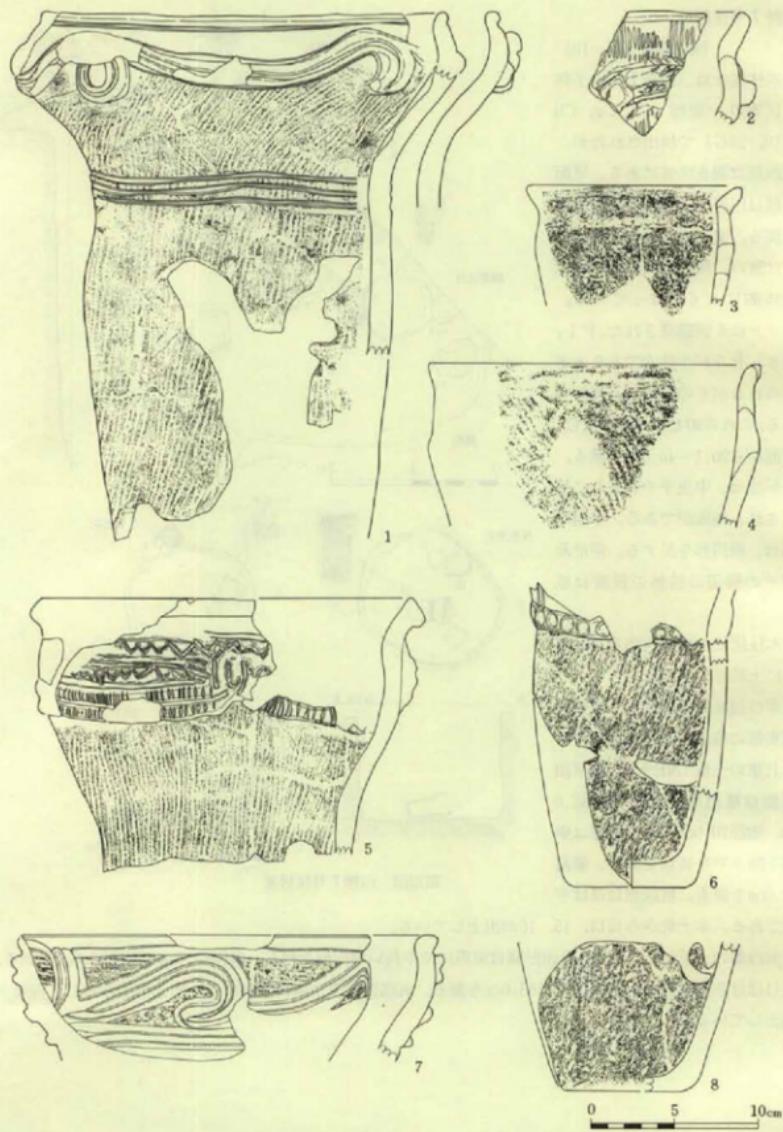
北東の土坑(NE土坑)の平面形態は梢円形を呈し長径86.0cm、短径70.0cmを測る。壁は東部を除きやや袋状を呈し、壁高63.0cmを測る。坑底面はほぼ平坦である。本土坑からは14, 15, 16が出土している。

南西部の土坑(SW土坑)の平面形態は東西にやや長い梢円形を呈し、長径83.0cm、短径97.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高53.0cmを測る。坑底面はやや南に傾斜する。本土坑からは17の深鉢が出土している。

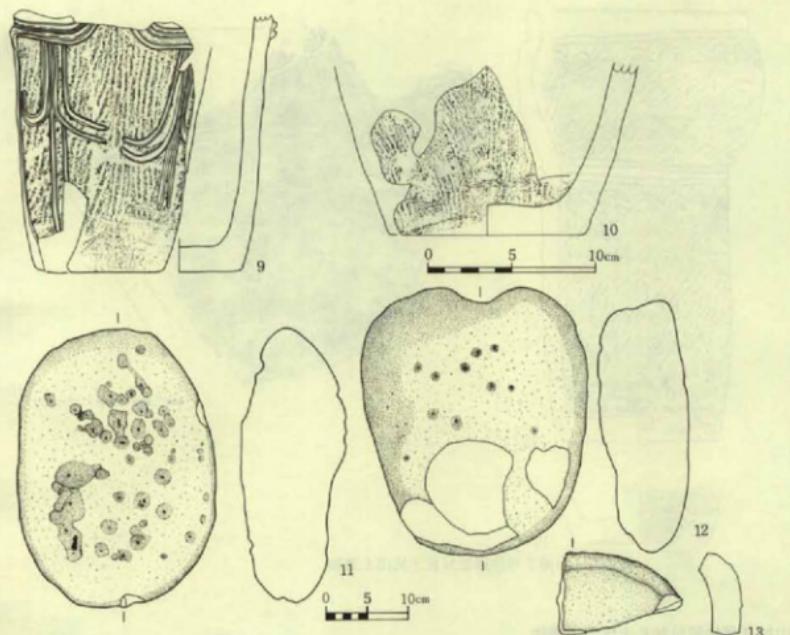


第32図 山神7号住居址

IV 検出した遺構と遺物



第33図 山神7号住居址出土遺物(1)



第34図 山神7号住居址出土遺物(2)

山神7号住居址出土遺物（第33・34図、第14表、PL-56）

1は、キャリバー型を呈する縄文土器・深鉢。

2から4は、口縁部破片。

5は、深鉢。

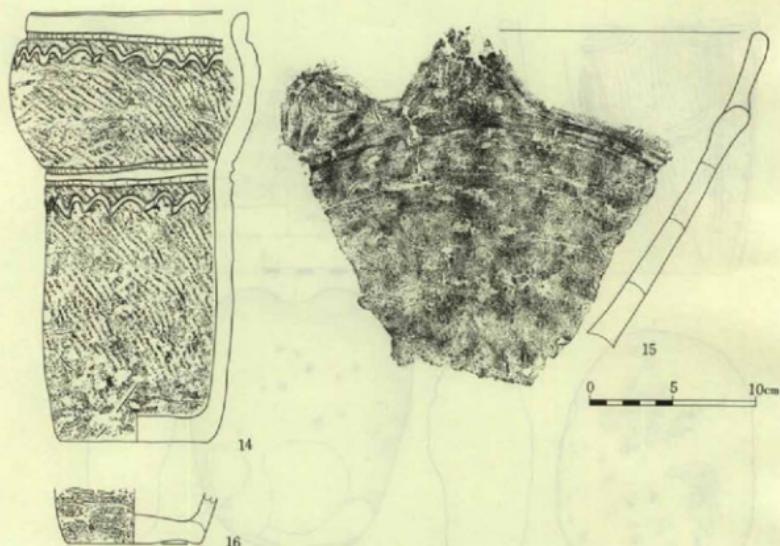
6は、口縁部を欠く深鉢。

7は、深鉢の口縁部破片。

8から10は、底部破片。

11・12は多孔石。

13は、石皿の破片。



第35図 山神7号住居址N E土坑出土遺物

山神7号住居址N E土坑出土遺物

(第35図、第15表、PL-57)

14は、土坑底面直上から出土した深鉢の完形個体。

15も、土坑底面直上から出土している波状の突起を有する浅鉢の破片。

16も、土坑底面直上から出土している深鉢の底部。

山神7号住居址S W土坑出土遺物

(第36図、第16表、PL-57)

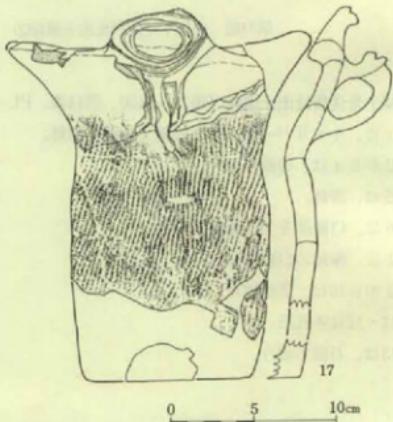
17は、頸部から口唇部へ橋状把手を施し、さらに口唇部に円形の把手を施す深鉢。

山神8号住居址 (第37図、PL-11)

本住居址は、山神I区の中央やや東寄り (Ci

-20, 21G) に位置する。本住居址は、平安時代の2号住居址と重複する。

平面形態は円形を呈するものと思われるが、その大部分を調査区外に位置するため、規模等不明な点



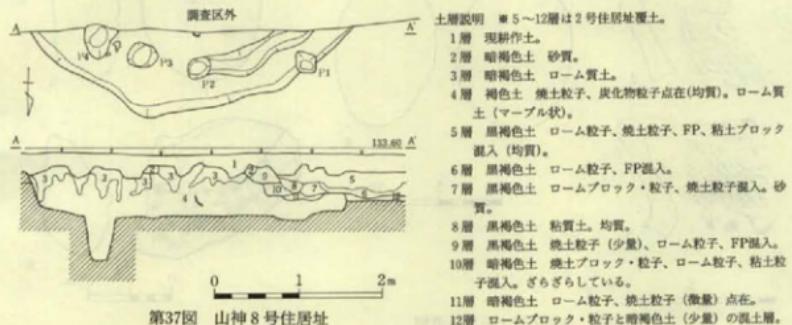
第36図 山神7号住居址S W土坑出土遺物

が多い。

炉址は、調査区内では確認できなかった。

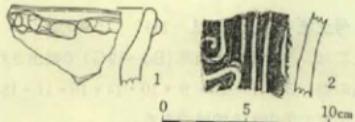
柱穴は、4個確認されたが、P1は本住居址に伴うものとは判断できない。

本住居址からの遺物出土は非常に少ない。



山神 8 号住居址出土遺物 (第38図、第17表)

1、2とも覆土中の出土である。



第38図 山神 8 号住居址出土遺物

小林 2 号土坑 (第39図、PL-11)

本土坑は、小林III区の南部 (Bl-13G) で検出された。

本土坑の南部には 8 号住居址が、北西部には 11 号住居址が位置する。

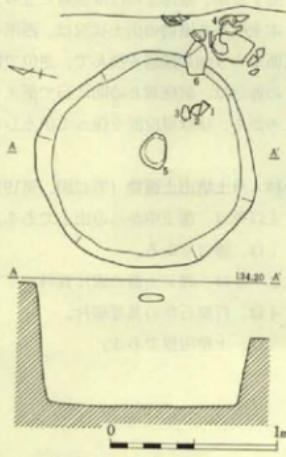
平面形は円形を呈し、規模は直径 130.0cm。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高 42.0～71.5cm を測る。

遺物の出土状況は、そのほとんどが、坑底から浮いた状態もしくは周辺から出土しており、本土坑に伴うものとは判断できない。

小林 2 号土坑出土遺物 (第40図、第18表)

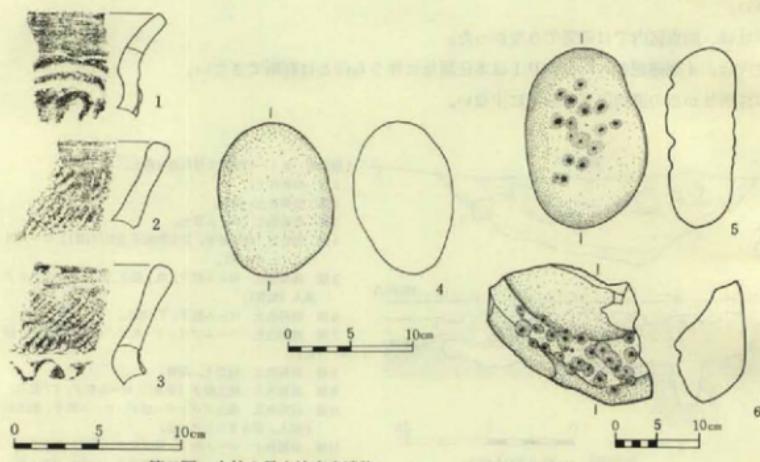
1～3は、縄文土器口縁部の破片で、2、3は同一個体と考えられる。

4は、磨石。5は多孔石。6は石皿の破片。



第39図 小林 2 号土坑

IV 検出した遺構と遺物



第40図 小林2号土坑出土遺物

小林4号土坑 (第41図、PL-11)

本土坑は、小林III区の南部(Bo-12G)で検出された。周辺は、本土坑の他、5・7・8・9・10・14・16・17・18号土坑が検出され、土坑の集中する地域である。

平面形態は円形を呈し、直径91.0cmを測る。壁は、西部で袋状を呈するが、東部ではほぼ垂直に立ち上がり壁高61.6cmを測る。

本土坑から遺物の出土状況は、西部の袋状を呈する壁寄りの坑底面から6cmの間層を挟んで、逆位で器台(1)が出土している。この器台は、坑底面との間に石で据えられる様に措かれてあるところから、ほぼ現位置を保って出土したものと判断できる。

小林4号土坑出土遺物 (第42図、第19表、PL-57)

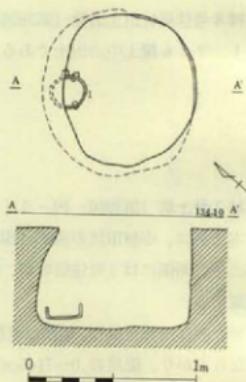
1以外は、覆土中からの出土である。

1は、器台である。

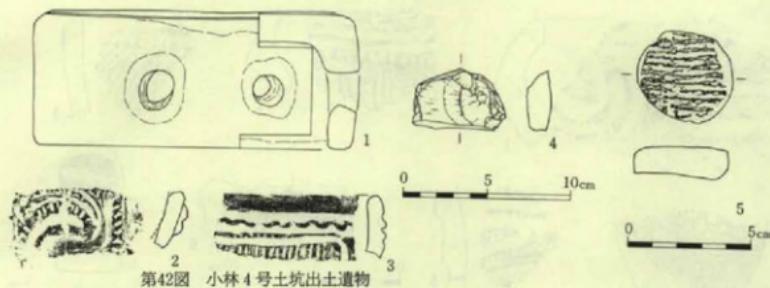
2・3は、縄文土器の破片資料。

4は、打製石斧の基部破片。

5は、土整円盤である。



第41図 小林4号土坑



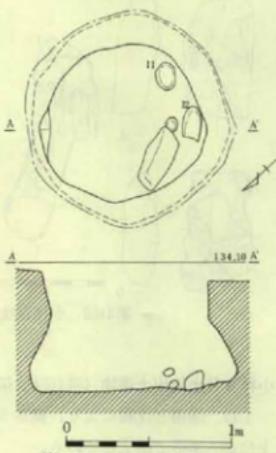
第42図 小林4号土坑出土遺物

小林5号土坑（第43図、PL-11）

本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域の最南部(Bo, BP-11, 12G)で検出された。

平面形態は円形を呈し、径96.0cmを測る。壁は袋状を呈し、壁高65.0mを測る。

遺物の出土状況は、覆土上面から坑底面まで間断なく出土したが、土器においては破片個体が多い。坑底面直上から多孔石が2点出土している。



第43図 小林5号土坑

小林5号土坑出土遺物（第44図、第20表、PL-57）

1～6は、破片資料であり、2, 3は同一個体と思われる。7は、土製円盤。

8～10は打製石斧。

11, 12は多孔石。

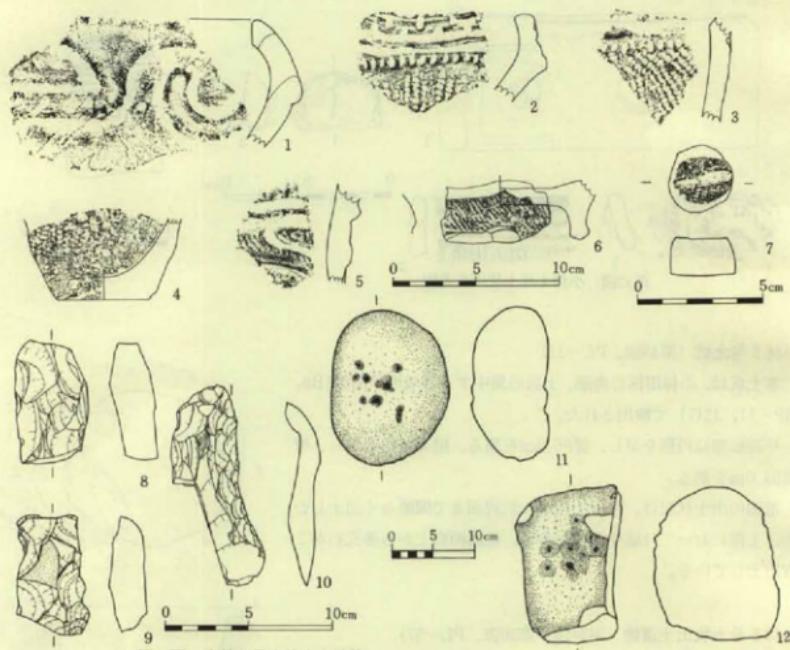
小林6号土坑（第45図、PL-11）

本土坑は、小林III区の南部(Bk-13, 14G)に位置し、南東には11号住居址が、北東には11号土坑が、それぞれ位置する。

平面形態は円形を呈し、直径98.0cmを測る。壁は東壁の一部でオーバーハングするものの、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高38～40cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土状況は、遺構確認面から坑底面まで、間断なく出土する。遺物は、比較的大型の破片が多い。

IV 検出した遺構と遺物



第44図 小林5号土坑出土遺物

小林6号土坑出土遺物 (第46図、第21表、PL-58)

1は、隆帯と沈線により、渦巻き文を構成する浅鉢で、覆土の上位から逆位で出土している。

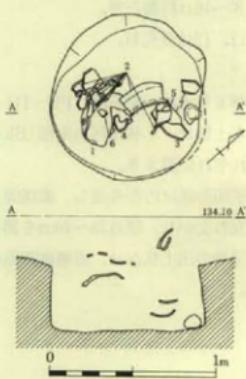
2は、頸部から外反する無文の口縁部を有する深鉢。

3は、隆帯を口唇部から垂下する深鉢。

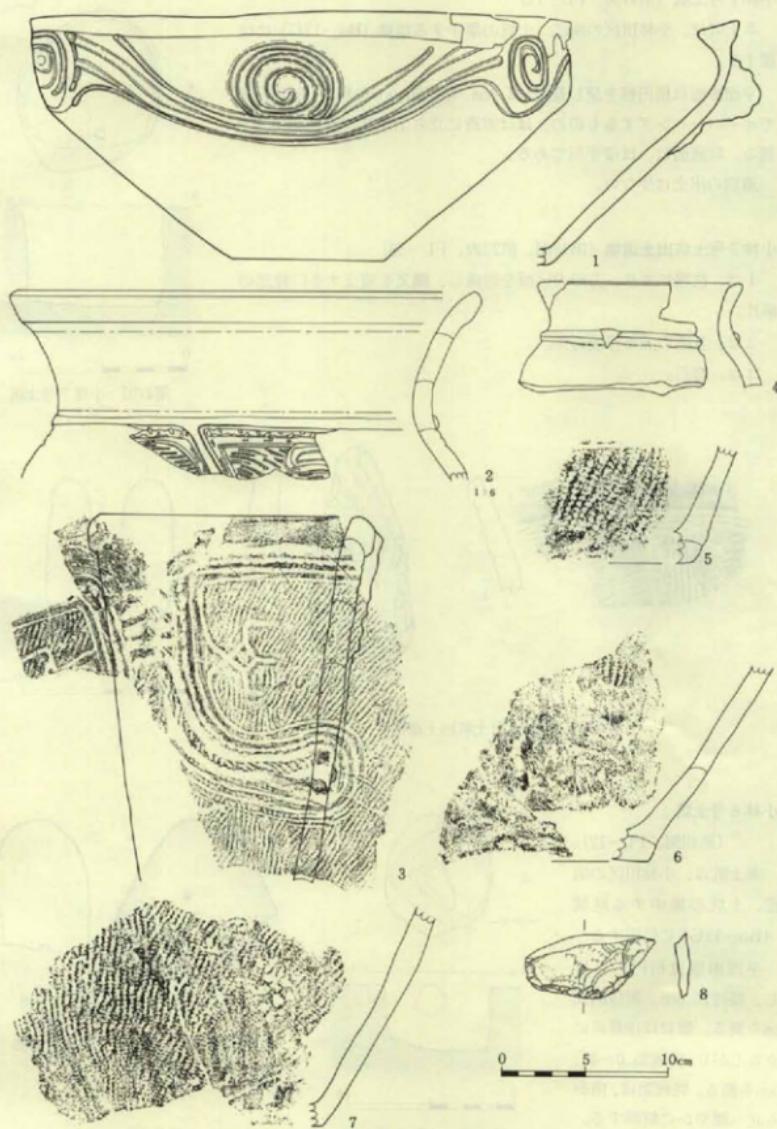
4は、ミニチュア土器。

5から7は、底部破片資料。

8は、搔器。



第45図 小林6号土坑



第46図 小林6号土坑出土遺物

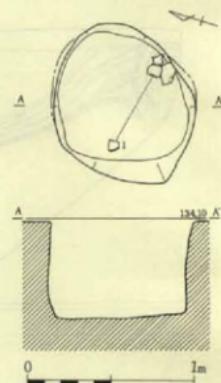
IV 検出した遺構と遺物

小林7号土坑（第47図、PL-12）

本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域（Bo-12G）に位置する。

平面形態は梢円形を呈し長径104.0cm、短径80.0cmを測る。壁は一部でオーバーハングするものの、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高56.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土は少ない。

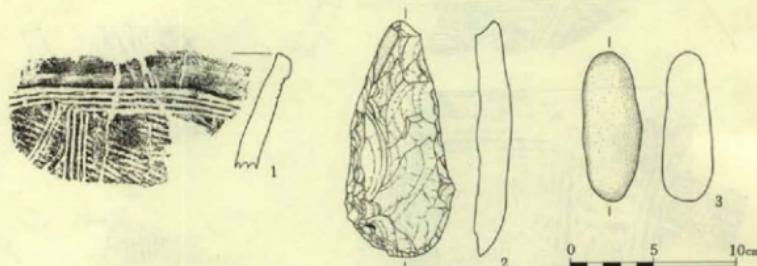


小林7号土坑出土遺物（第48図、第22表、PL-58）

1は、沈線により、方形の区画を形成し、網文を施文する口縁部の破片。

2は、基部の尖る打製石斧。

3は、磨石。



第48図 小林7号土坑出土遺物

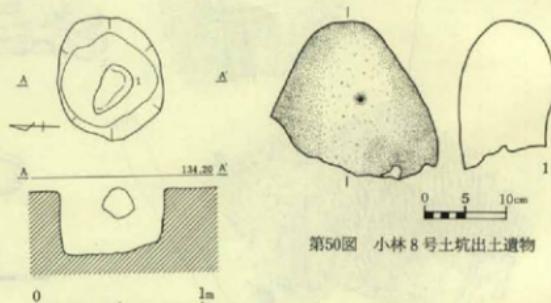
小林8号土坑

（第49図、PL-12）

本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域（Bo-12G）に位置する。

平面形態は梢円形を呈し、長径76.0cm、短径64.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高35.0~40.0cmを測る。坑底面は、南北へ緩やかに傾斜する。

遺物の出土は、図示した



第49図 小林8号土坑

第50図 小林8号土坑出土遺物

多孔石の1点のみであった。

小林8号土坑出土遺物（第50図、第23表）

1は、多孔石。

小林9号土坑（第51図、PL-12）

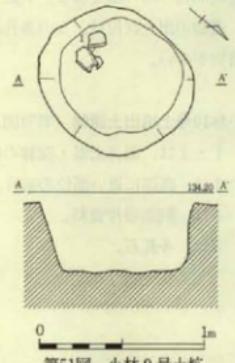
本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域（Bo-12・13G）に位置する。

平面形態は、楕円形を呈し長径92.0cm、短径83.0cmを測る。壁は西壁でほぼ垂直に立ち上がるものの、全体的に傾斜は緩やかで、壁高42.0cmを測る。坑底面は、やや凸凹している。

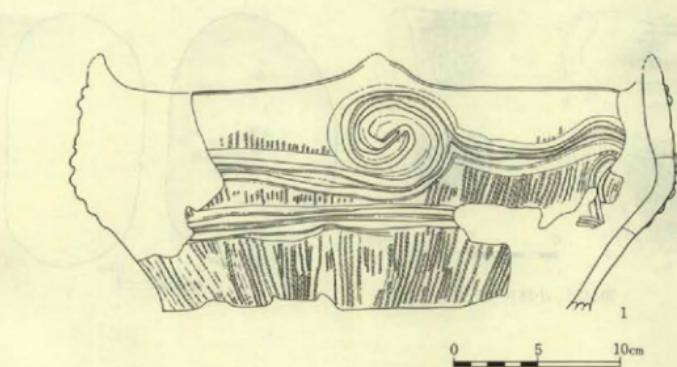
遺物の出土は、図示した1以外の出土はなかった。

小林9号土坑出土遺物（第52図、第24表、PL-58）

背割り縁部により口縁部に渦巻き紋を施す柵文土器・深鉢。地文には、L燃系を縦位に施す。



第51図 小林9号土坑



第52図 小林9号土坑出土遺物

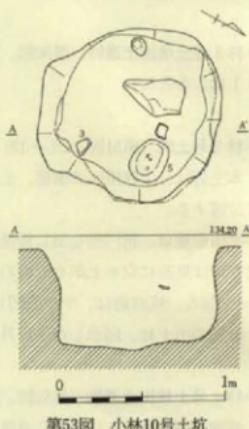
IV 検出した遺構と遺物

小林10号土坑（第53図、PL-12）

本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域（Bn-13G）に位置する。

平面形態は、やや歪な円形を呈し長径110.0cm、短径104.0cmを測る。壁は北壁でオーバーハンプするものの、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高55.0~58.0cmを測る。坑底面は、やや凸凹がある。

遺物の出土状況は、5の多孔石および礫が出土したほかは、破片遺物が多い。



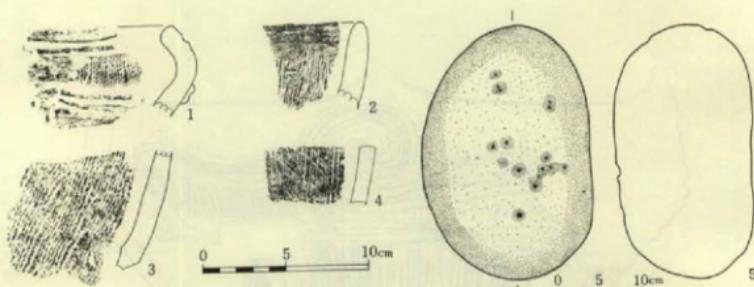
小林10号土坑出土遺物（第54図、第25表、PL-59）

1・2は、縄文土器・深鉢の口縁部破片資料。

3は、底部に近い部位の破片。

4は、胴部破片資料。

5は、多孔石。

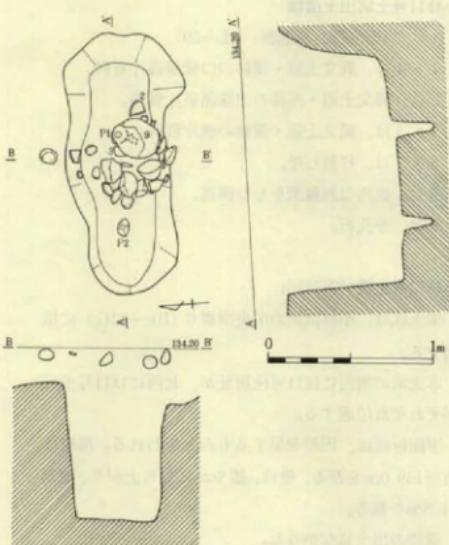


第54図 小林10号土坑出土遺物

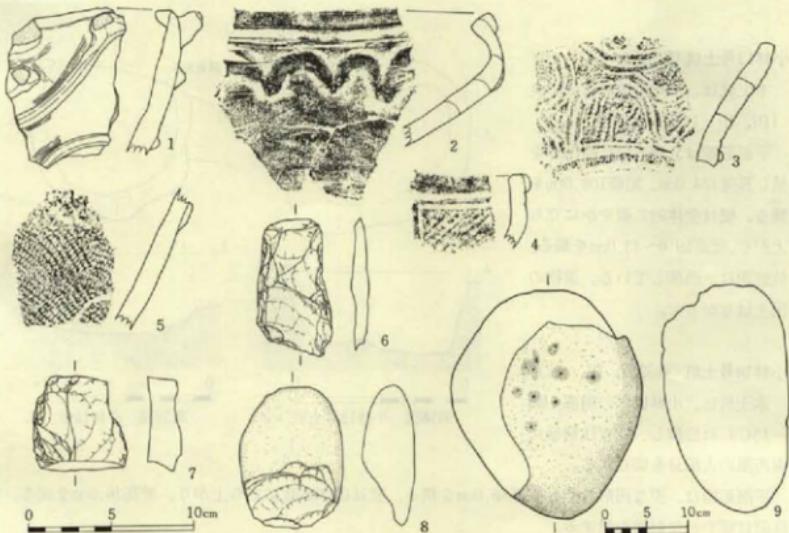
小林11号土坑（第55図、PL-12）

本土坑は、小林III区の中央南より(Bk-13G)に位置する。本土坑の南には11号住居址、南東には12号土坑が、南西には6号土坑がそれぞれ位置する。本土坑は、多孔石ほか遺物の集中する箇所を掘り下げ確認されたものである。

平面形態は、丸味を帯びた長方形を呈し長軸長156.0cm、短軸長64.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高61.0~70.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であり、長軸方向に逆茂木痕を2個確認できた。この逆茂木痕の深度は、坑底面からそれぞれ18.0cm、24.0cmを測る。



第55図 小林11号土坑



第56図 小林11号土坑址出土遺物

IV 検出した遺構と遺物

小林11号土坑出土遺物

(第56図、第26表、PL-59)

- 1・4は、縄文土器・深鉢の口縁部破片資料。
- 2は、縄文土器・浅鉢の口縁部破片資料。
- 3・5は、縄文土器・深鉢の破片資料。
- 6・7は、打製石斧。
- 8は、鋭角な剝離面をもつ砾器。
- 9は、多孔石。

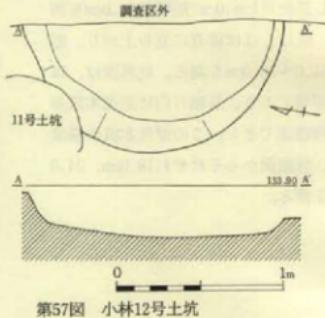
小林12号土坑 (第57図)

本土坑は、小林III区の中央南寄り(Bk-13G)に位置する。

本土坑の南西には11号住居址が、北西には11号土坑がそれぞれ位置する。

平面形態は、円形を呈するものと思われる。規模は、直径159.0cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、壁高31.8cmを測る。

遺物の出土はなかった。

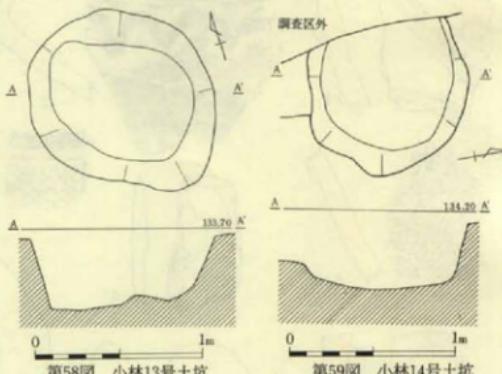


第57図 小林12号土坑

小林13号土坑 (第58図、PL-12)

本土坑は、小林III区のほぼ中央(Bi, Bj-14G)に位置する。

平面形態は、やや歪な楕円形を呈し長径124.0cm、短径108.0cmを測る。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、壁高39.0~43.0cmを測る。坑底面は、凸凹している。遺物の出土はなかった。

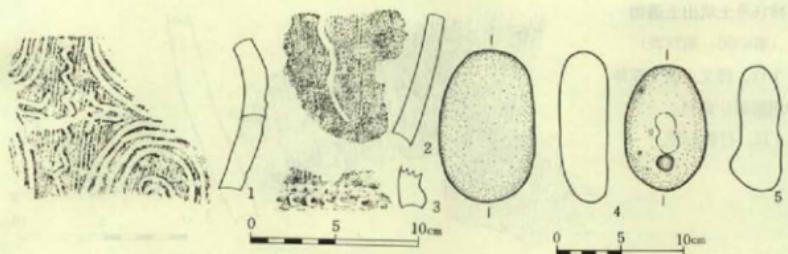


小林14号土坑 (第59図、PL-12)

本土坑は、小林III区の南部(Bn-13G)に位置し、12号住居址に南西部の大部分を切られる。

平面形態は、歪な円形を呈し直径86.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高36.0cmを測る。坑底面は緩やかな皿状を呈する。

遺物は、破片がほとんどであった。



第60図 小林14号土坑出土遺物

小林14号土坑出土遺物（第60図、第27表、PL-60）

1～3は、繩文土器の胸部破片である。

4、5は、磨石・凹石である。

小林15号土坑（第61図）

本土坑は、小林III区の南部（Bm-12G）に位置する。10号住居址と重複し、本土坑の方が新しい。

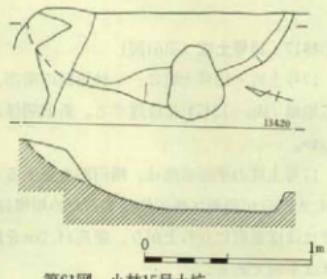
平面形態は、円形を呈するものと思われるがほとんどを調査区外に位置するため、規模等は判然としない。壁は西壁でほぼ垂直に立ち上がるものの、全体的に傾斜は緩やかで、壁高11.6cmを測る。坑底面は、やや凸凹している。

小林16号土坑（第62図、PL-13）

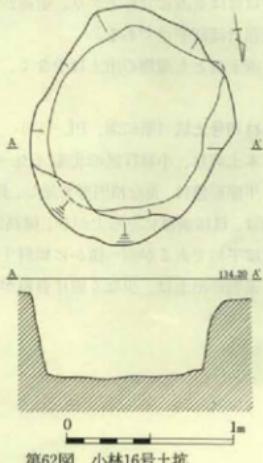
本土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域（Bn, Bo-12, 13G）に位置する。

平面形態は、やや歪な楕円形を呈し、長径144.0cm、短径110.0cmを測る。壁は、北東壁の一部でオーバーハングするものの、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高47.0～51.0cmを測る。

遺物の出土は少なく、土器破片及び打製石斧の刃部破片が出士した。



第61図 小林15号土坑



第62図 小林16号土坑

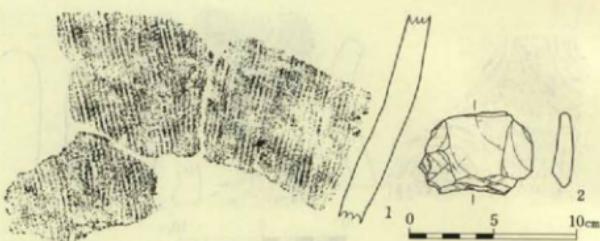
IV 検出した遺構と遺物

小林16号土坑出土遺物

(第63図、第28表)

1は、縄文土器・深鉢の洞部破片資料。

2は、打製石斧。



第63図 小林16号土坑出土遺物

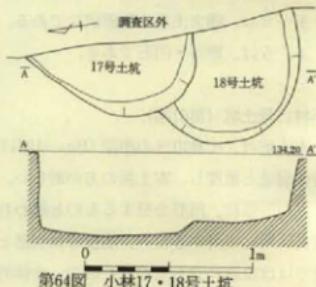
小林17・18号土坑 (第64図)

17号土坑・18号土坑は、小林III区の南部、土坑の集中する地域 (Bn-12G) に位置する。新旧関係は17号土坑が新しい。

17号土坑の平面形態は、橢円形を呈するものと思われるが、大部分が調査区外に位置するため規模は判然としない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高44.7cmを測る。坑底面はほぼ平坦である。

18号土坑の平面形態は、円形を呈し、直径88.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高29.9~33.3cmを測る。坑底面はほぼ平坦である。

両土坑とも遺物の出土は少なく、実測資料の出土はなかった。



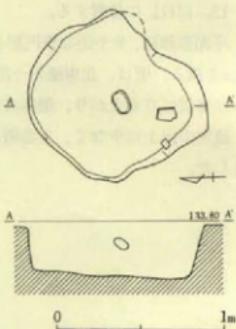
第64図 小林17・18号土坑

小林19号土坑 (第65図、PL-13)

本土坑は、小林IV区の北部 (Bt-10G) に位置する。

平面形態は、歪な橢円形を呈し、長径110.0cm、短径85.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高37.0~42.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが南へ僅かに傾斜する。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。

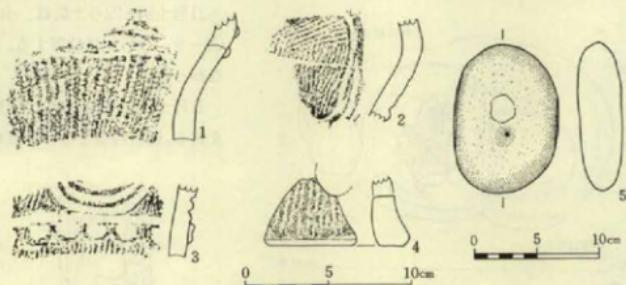


第65図 小林19号土坑

小林19号土坑出土遺物（第66図、第29表、PL-60）

1から3は、縄文土器・深鉢の破片資料。

4は、脚部。
5は、凹石。



第66図 小林19号土坑出土遺物

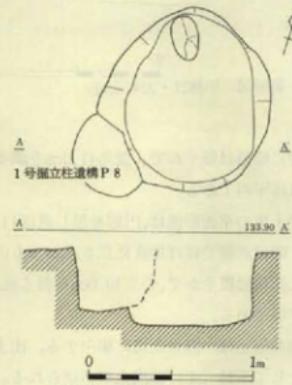
小林20号土坑（第67図）

本土坑は、小林IV区の北部 (Bt-10, 11G) 位置する。

本土坑は掘立柱遺構の柱穴 (P 8) に南の一部を切られる。

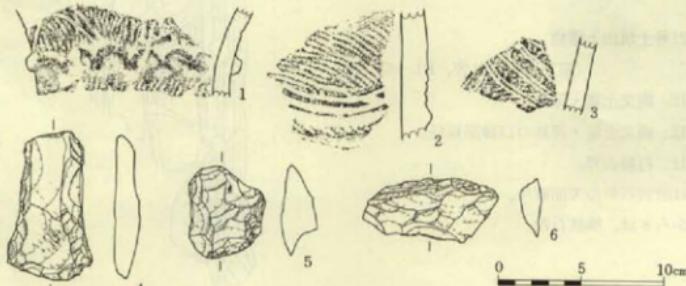
平面形態は、円形を呈し、直径100.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高38.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土状況は、坑底面直上から疊が出土した以外は、覆土中からの出土で、破片資料がほとんどであった。



小林20号土坑出土遺物（第68図、第30表、PL-61）

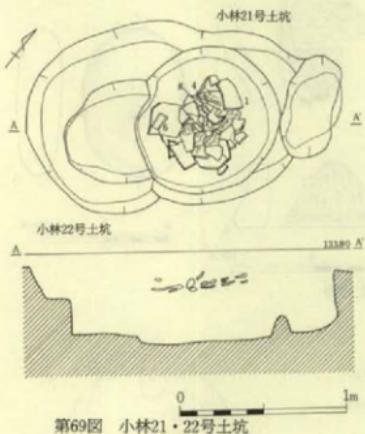
1から3は、縄文土器の破片である。4, 5は、打石斧。
6は、搔器。



第68図 小林20号土坑出土遺物

IV 検出した遺構と遺物

小林21・22号土坑 (第69図、PL-13)



第69図 小林21・22号土坑

全体的に傾斜は緩やかで、壁高41.0cmを測る坑底面は、ほぼ平坦である。

22号土坑の平面形態は、円形を呈し直径112.0cmを測る。壁は西壁でほぼ垂直に立ち上がるものの、全体的に傾斜は緩やかで、壁高40.0cmを測る坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土は、21号土坑に集中する。出土状況の特徴として深鉢（1）の出土があげられる。この深鉢は打ち欠かれた後、他の遺物（2～8）とともに、敷き積めるような状態で出土している。

小林21号土坑出土遺物

(第70図、第31表、PL-61, 62)

1は、縄文土器・深鉢。

2は、縄文土器・深鉢の口縁部資料。

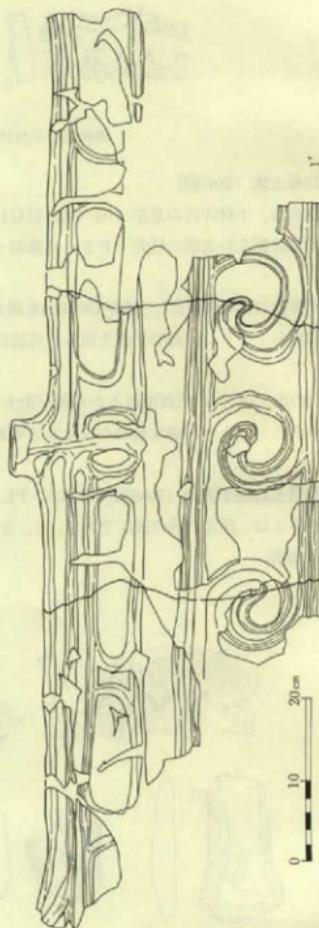
3は、打製石斧。

4は磨製石斧の刃部破片。

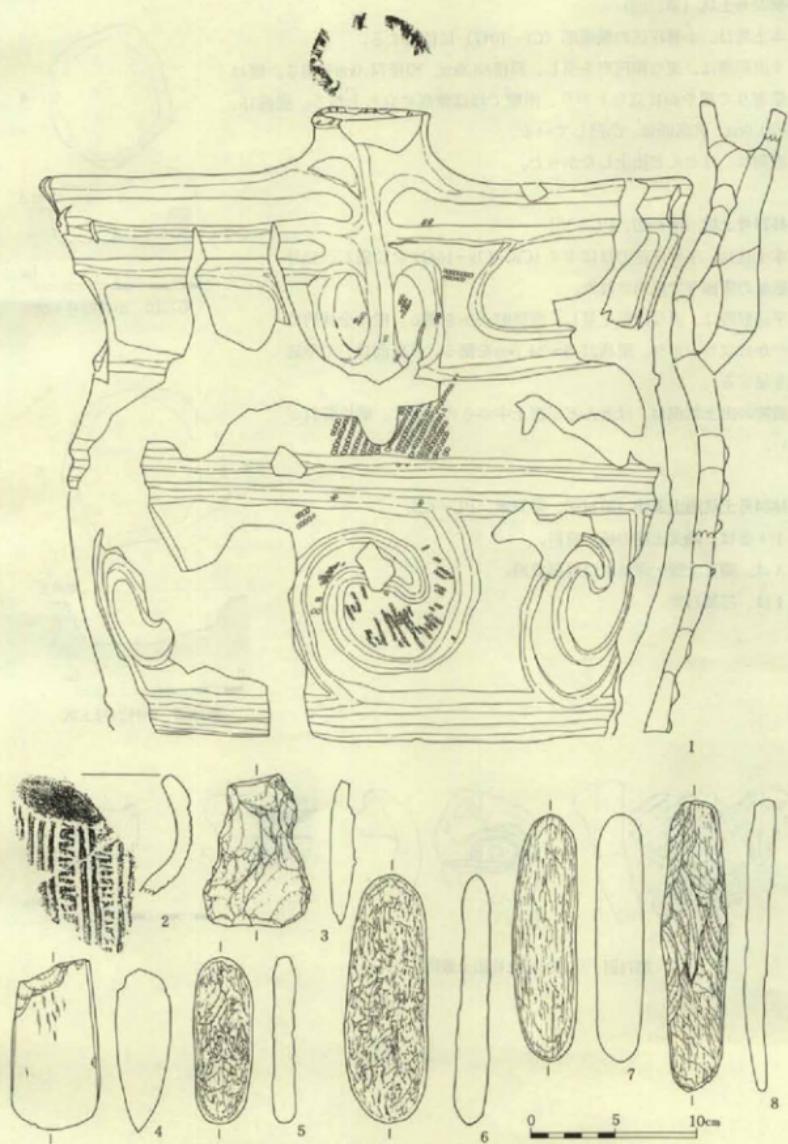
5から8は、棒状石器。

21号土坑・22号土坑は、小林IV区の南部 (Ce, Cf-9, 10G) に位置する。新旧関係は確認できなかった。

21号土坑の平面形態は、円形を呈し直径104.0cmを測る。壁は西壁でほぼ垂直に立ち上がるものの、



第70図 小林21号土坑出土遺物(1)



第71図 小林21号土坑出土遺物(2)

IV 検出した遺構と遺物

小林23号土坑（第72図）

本土坑は、小林IV区の最南部（Cf—10G）に位置する。

平面形態は、亜な楕円形を呈し、長径88.0cm、短径74.0cmを測る。壁は北壁寄りで緩やかに立ち上がり、南壁ではほぼ垂直に立ち上がる。壁高16.0～20.0cm。坑底面は、凸凹している。

遺物は、ほとんど出土しなかった。

小林24号土坑（第73図、PL-13）

本土坑は、小林IV区のほぼ中央（Ca, Cb—10G）に位置し、13号住居址の床面下で検出された。

平面形態は、亜な円形を呈し、直径93.0cmを測る。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、壁高21.5～24.5cmを測る。坑底面は、やや皿状を呈する。

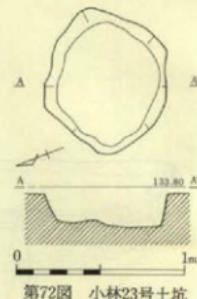
遺物の出土状況は、ほとんどが覆土中からの出土で、破片資料が多い。

小林24号土坑出土遺物（第74図、第32表、PL-62）

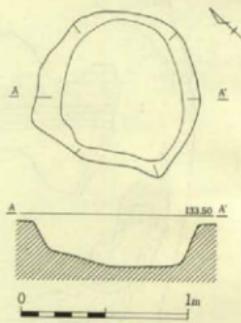
1・2は、縄文土器の破片資料。

3は、縄文土器・深鉢の口縁部資料。

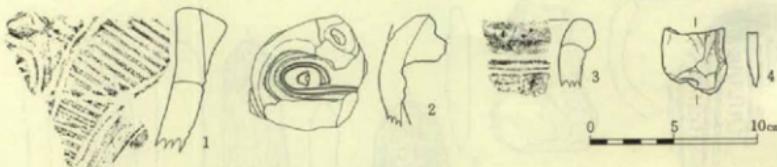
4は、打製石斧。



第72図 小林23号土坑



第73図 小林24号土坑



第74図 小林24号土坑出土遺物

小林25号土坑（第75図、PL-13）

本土坑は、小林IV区のほぼ中央 (Ca, Cb-10G) に位置し、24号土坑同様13号住居址の床面下で検出された。

平面形態は、歪な円形を呈し、直径98.0cmを測る。

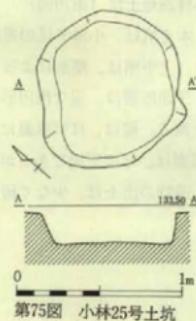
壁は全体的に緩やかに立ち上がり、壁高17.0~19.0cmを測る。坑底面は、やや皿状を呈する。

遺物の出土状況は、ほとんどが覆土中からの出土で、破片資料が多い。

小林25号土坑出土遺物（第76図、第33表、PL-63）

1・2は、打製石斧。

3は、搔器。



第75図 小林25号土坑



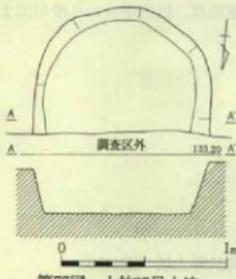
第76図 小林25号土坑出土遺物

小林27号土坑（第77図）

本土坑は、小林V区の東部 (Cg-13G) に位置する。一部は調査区外に存在する。

平面形態は、円形を呈し、直径104.0cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高26.0cmを測る。坑底面はほぼ平坦である。

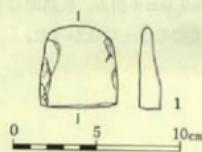
遺物の出土は、ほとんどなく。図示した打製石斧の破片のみであった。



第77図 小林27号土坑

小林27号土坑出土遺物（第78図、第34表、PL-63）

打製石斧の基部破片。摩耗が著しい。



第78図 小林27号土坑出土遺物

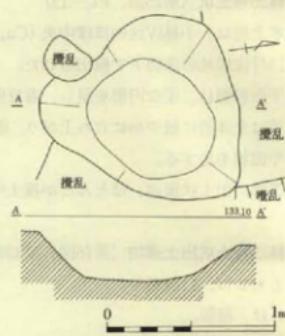
IV 検出した遺構と遺物

小林28号土坑（第79図）

本土坑は、小林V区の東部（Ch, Ci-13G）に位置する。また、上半部は、攪乱によって破壊されている。

平面形態は、歪な橢円形を呈し、長径120.0cm、短径108.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高27.4cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが南へ僅かに傾斜する。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



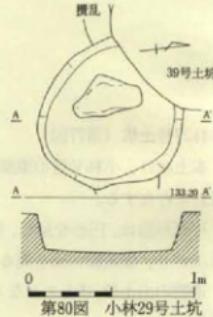
第79図 小林28号土坑

小林29号土坑（第80図、PL-13）

本土坑は、小林V区の東部（Ch, Ci-13, 14G）に位置する。

平面形態は、円形を呈し、径87.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高23.5cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物は、坑内中央から礫が出土しているほかはなかった。



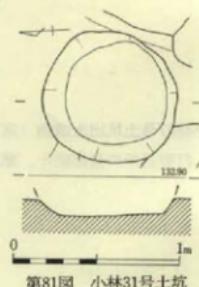
第80図 小林29号土坑

小林31号土坑（第81図）

本土坑は、小林V区の東部（Ch-14G）に位置し、上部は攪乱を受けており、保存状態は良くなかった。

平面形態は、円形を呈し、径80.0cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高9.0cmを測る。坑底面は平坦である。

遺物の出土はなかった。



第81図 小林31号土坑

小林32号土坑（第82図、PL-14）

本土坑は、小林V区の中央東より（Ch, Ci-14G）に位置する。

平面形態は、円形を呈し、径106.0cmを測る。壁は、袋状を呈し、壁高72.0cmを測る。坑底面は、やや皿状を呈する。

遺物の出土状況は、1が逆位で坑底面から約14cmの位置で出土しているほかは、ほとんどが覆土中からの出土であった。

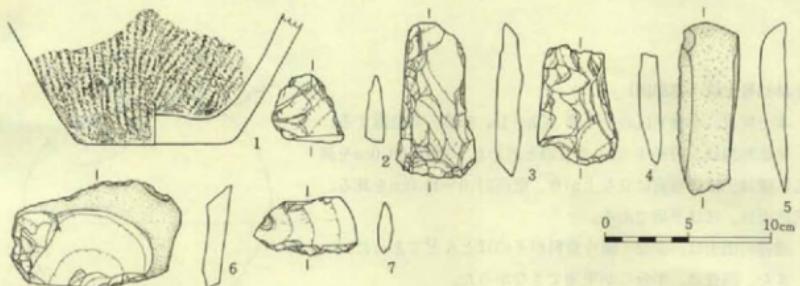


小林32号土坑出土遺物（第83図、第35図、PL-63）

1は、縄文土器・深鉢の底部。

2から5は打製石斧。

6・7は、搔器。



第83図 小林32号土坑出土遺物

小林33号土坑（第84図）

本土坑は、小林V区の中央（Ch-14G）に位置し、上面を擾乱により破壊され、保存状況は良くなかった。

平面形態は、円形を呈し、直径60.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高12.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが南へ僅かに傾斜する。遺物の出土はなかったが、覆土の状況から縄文時代の土坑と判断した。

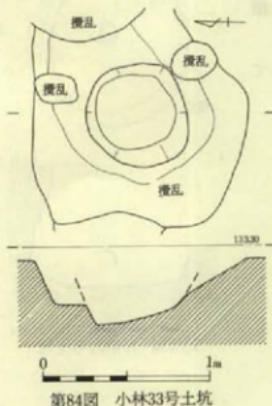
小林34号土坑（第85図、PL-14）

本土坑は、小林V区の中央部（Ch-14G）に位置する。北側を擾乱により破壊される。

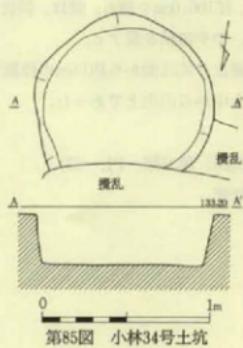
平面形態は、円形を呈し、径138.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高30.0cmを測る。坑底面はほぼ平坦であるが南へ僅かに傾斜する。

IV 検出した遺構と遺物

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



第84図 小林33号土坑



第85図 小林34号土坑

小林35号土坑（第86図）

本土坑は、小林V区の中央部（Ch-14, 15G）に位置する。

平面形態は、円形を呈するものと思われ、直径150.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高27.0~45.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。

また、調査は、半分しか実施できなかった。

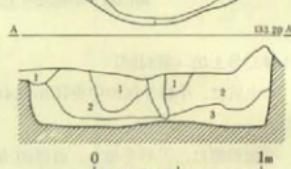
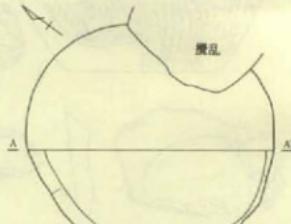
小林36号土坑（第87図）

本土坑は、小林V区の中央部（Cg-15G）に位置する。

平面形態は、橢円形を呈するものと思われ、長径123.0cmを測るが、調査区外に一部存在するため、短径は不明である。

壁はほぼ垂直に立ち上がるが調査の不備からレベリングしなかったため、壁高は不明である。坑底面は、ほぼ平坦である。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



土層説明
 1層 暗褐色土 ロームブロック混入。
 2層 暗褐色土 ローム質土。
 3層 暗褐色土 2層に酷似。2層より明るい。

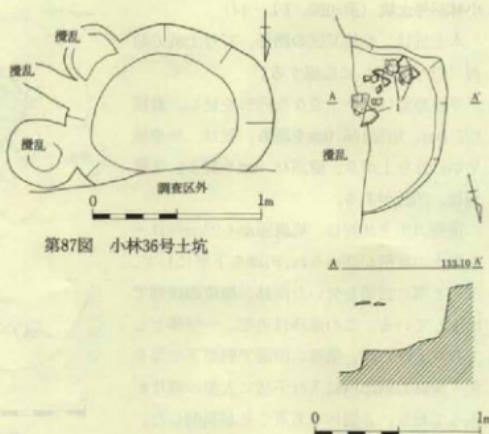
第86図 小林35号土坑

小林37号土坑（第88図、PL-14）

本土坑は、小林V区の西部（Ch-17G）に位置する。東部を擾乱により破壊され半分程度の残存状況であった。

平面形態は、円形を呈するものと思われ、径106.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高30.0cmを測る。坑底面は、やや凸凹している。

遺物の出土状況は、南部で縄文土器・深鉢の破片が出土しているが、底面からは浮いている。



第87図 小林36号土坑

第88図 小林37号土坑

小林37号土坑出土遺物

（第89図、第36表、PL-64）

出土遺物は、縄文土器・深鉢で、キャリバー型を呈する。頸部に隆帯を一条添付し、口縁部は、大きく内湾したのち口唇部でくの字に小さく外反する。

器形は、やや細身で、地文には、単節縄文RLを施す。



第89図 小林37号土坑出土遺物

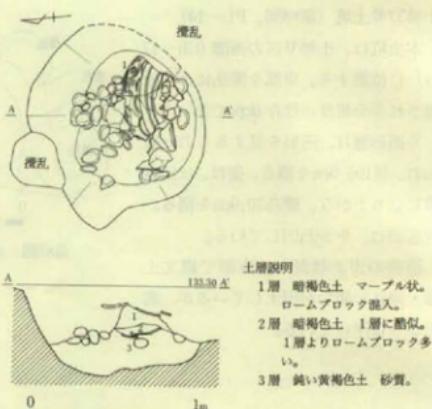
IV 検出した遺構と遺物

小林38号土坑（第90図、PL-14）

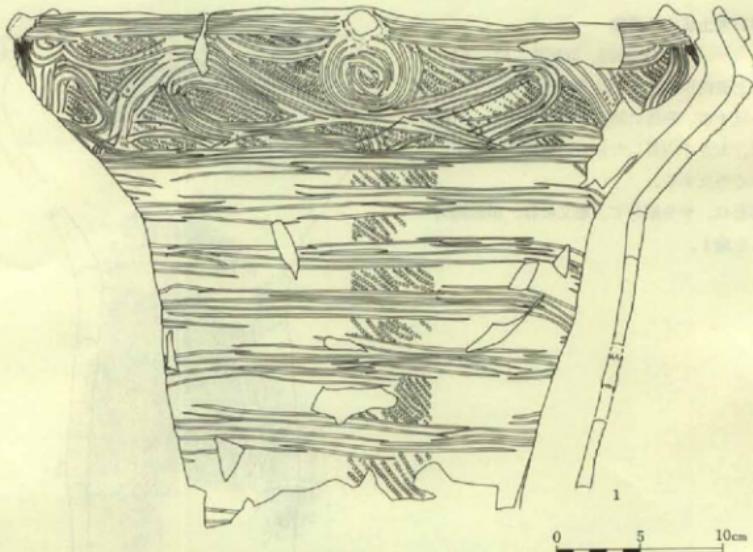
本土坑は、小林V区の西部、37号土坑の北西（Ch-17G）に位置する。

平面形態は、やや歪な楕円形を呈し、長径122.0cm、短径106.0cmを測る。壁は、やや緩やかに立ち上がり、壁高48.0cmを測る。坑底面は、凹凸がある。

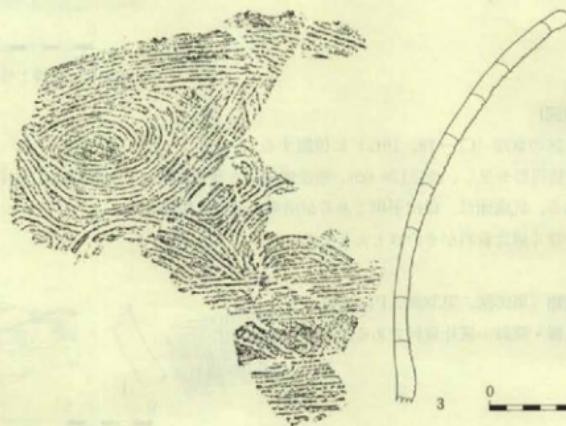
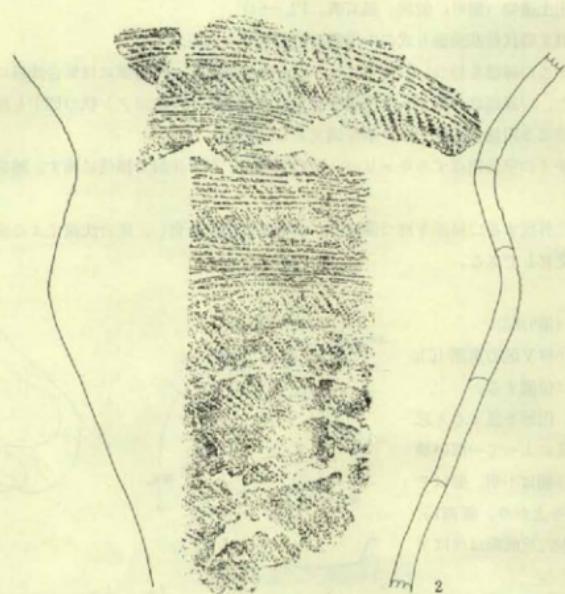
遺物の出土状況は、坑底面から22cm程ローム質土の堆積が認められ、円錐を下層にして、その上部に底部を欠いた深鉢が横置の状態で出土している。この深鉢は当初、一個体として取り上げたが、整理の段階で胴部下半部を欠く深鉢の胴部内に入れ子状に大型の破片が入っており、3個体であることが判明した。



第90図 小林38号土坑



第91図 小林38号土坑出土遺物(1)



第92図 小林38号土坑出土遺物(2)

IV 検出した遺構と遺物

小林38号土坑出土遺物（第91、92図、第37表、PL—64）

いずれも、縄文時代前期諸碳b式の中段階に位置付けられる。

1は、内湾する口縁部を持ついわゆるキャリバー形の深鉢で、口縁部には集合沈線により、渦巻文を構成する。また、口縁部は、緩やかな波状を呈し、波長部に4単位ボタン状の把手を添付する。肩部は平行沈線を横位に5段施す。地文は、単節縄文R Lである。

2は、頸部をくの字の屈曲するキャリバー形の深鉢で、平行沈線を横位に施す。地文は、単節縄文R Lである。

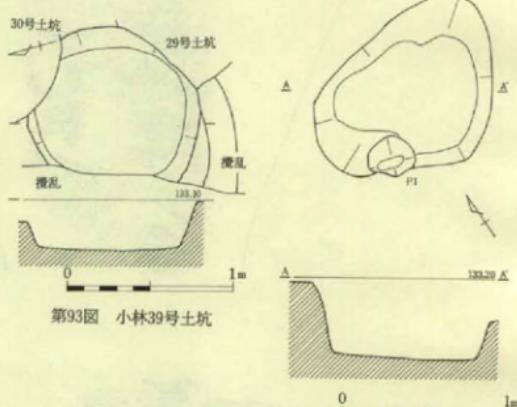
3は、大きく外反する口縁部を持つ深鉢で、口唇部に突起を有し、集合沈線による渦巻文を施す。地文は、単節縄文R Lである。

小林39号土坑（第93図）

本土坑は、小林V区の東部（Ch—13、14G）に位置する。

平面形態は、円形を呈すると思われるが、擾乱によって一部破壊されており、詳細は不明。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高15.0～30.0cmを測る。坑底面はほぼ平坦である。

本土坑からの遺物の出土はない。



第93図 小林39号土坑

第94図 山神1号土坑

山神1号土坑（第94図）

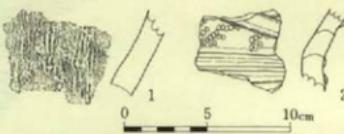
本土坑は、山神I区の東部（Ch—18、19G）に位置する。

平面形態は、歪な椭円形を呈し、長径126.0cm、短径93.0cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高18.0～42.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが南東へ僅かに傾斜する。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。

山神1号土坑出土遺物（第95図、第38表、PL—64）

1、2とも縄文土器・深鉢の破片資料である。



第95図 山神1号土坑出土遺物

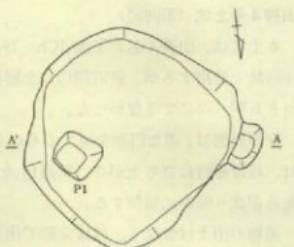
山神2号土坑（第96図）

本土坑は、山神I区の東部（Ch-19G）に位置する。

平面形態は、やや歪な円形を呈し、直径120.0cmを測る。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高36.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。坑底面にピットを持つ。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



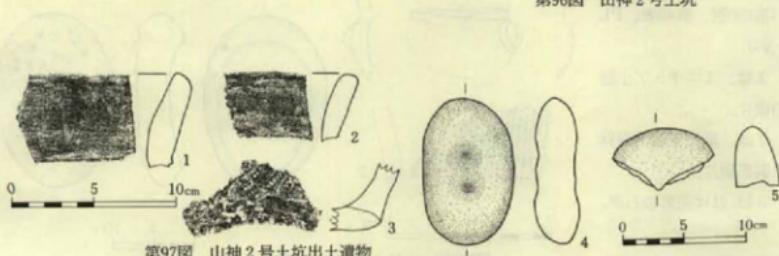
山神2号土坑出土遺物（第97図、第39表、PL-64）

1・2は、無文の口縁部破片。同一個体のものと思われる。

3は、繩文土器・深鉢の底部破片。

4は、凹石。

5は、磨石の破片。

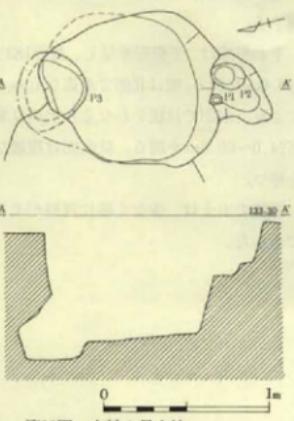


山神3号土坑（第98図、PL-14）

本土坑は、山神I区の東部（Ch-20G）に位置する。

平面形態は、やや歪な楕円形を呈し、長径135.0cm、短径90.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高60.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦である。南部に2つのピットを持ち、北部の坑底面下にオーバーハングする付属施設を持つ。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



第98図 山神3号土坑

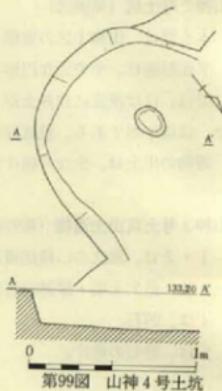
N 検出した遺構と遺物

山神4号土坑（第99図）

本土坑は、山神I区の東部（Ch-19, 20G）に位置する。北部は7号住居址と重複するが、新旧関係は土層状況等からは判断できず出土遺物からも明らかにできなかった。

平面形態は、歪な円形を呈するものと思われ、直径123.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高18.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが北へ僅かに傾斜する。

遺物の出土は少なく、ほぼ完形で出土した石皿以外は破片資料であった。



第99図 山神4号土坑

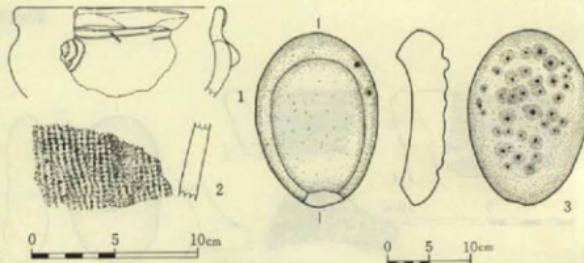
山神4号土坑出土遺物

(第100図、第40表、PL-65)

1は、ミニチュア土器の破片。

2は、縄文土器・深鉢の胸部破片。

3は、ほぼ完形の石皿。

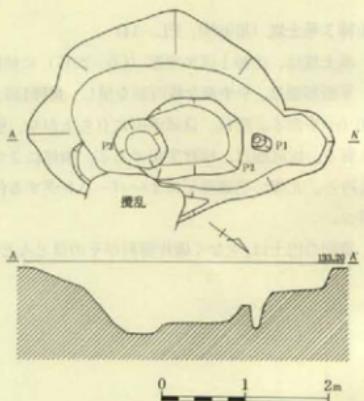


山神5号土坑（第101図）

本土坑は、山神I区の中央部（Ch-21G）に位置する。

平面形態は、不整形を呈し、長径183.0cm、短径144.0cmを測る。壁は北部で垂直な立ち上がりを呈するが、南部では緩やかな立ち上がりを呈し、壁高24.0~66.0cmを測る。坑底面は複雑な多段構造を持つ。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。



第101図 山神5号土坑

山神 6号土坑 (第102図)

本土坑は、山神 I 区の西部 (Ch-24G) に位置し、北部が調査区外に存在する。

平面形態は、やや歪な円形を呈し、直径156.0cmを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高72.0~78.0cmを測る。坑底面は、ほぼ平坦であるが南へ僅かに傾斜する。

遺物の出土は、少なく破片資料がそのほとんどであった。

小林 1号集石 (第103図、PL-14)

本集石は、小林IV区の7号溝の底面で確認された。

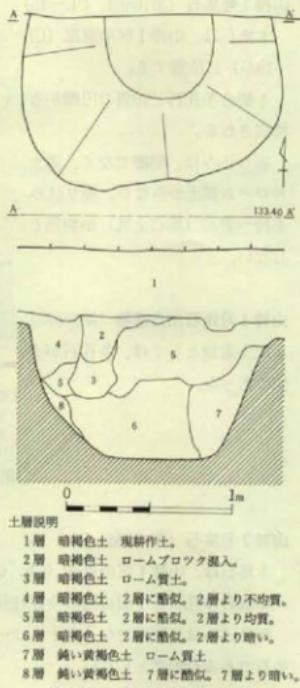
(Cd-9 G)

掘り込みは、2段構造を呈し、円形の掘り込み中に橢円形の掘り込みを持つ。

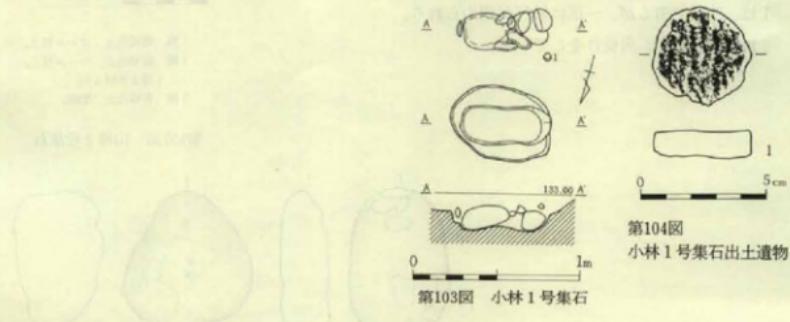
9個の円碟から構成され、周辺から土製円盤が出士している。

小林 1号集石出土遺物 (第104図、第41表)

出土遺物は、やや大きめの土製円盤である。



第102図 山神 6号土坑



IV 検出した遺構と遺物

山神 1 号集石 (第105図、PL-15)

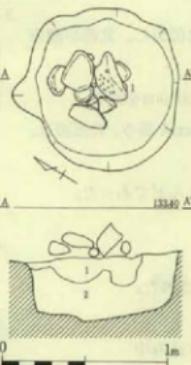
本集石は、山神 I 区の東部 (Ci-19G) に位置する。

1 個の多孔石と 10 個の円砾から構成される。

掘り込みは、明確でなく、覆土もローム質土からなり、掘り込みを持つ集石 (集石土坑) か判然としない。

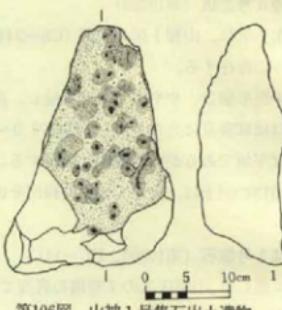
山神 1 号集石出土遺物 (第106図)

出土遺物としては、多孔石が 1 個であった。



土層説明
1 層 暗褐色土 ローム質土。
2 層 暗褐色土 ローム質土。
1 層より明るい。

第105図 山神 1 号集石



第106図 山神 1 号集石出土遺物

山神 2 号集石 (第107図、PL-15)

本集石は、山神 I 区の東部 (Ch, Ci-20G) に位置する。

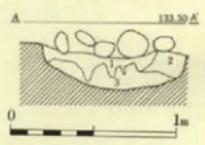
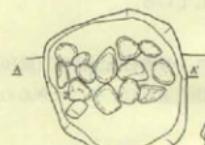
1 個の多孔石と 1 個の凹石及び 12 個の円砾から構成される。

掘り込みは、明確でなく覆土もローム質土からなり、掘り込みを持つ集石であるか判然としない。

山神 2 号集石出土遺物 (第108図、第43表、PL-65)

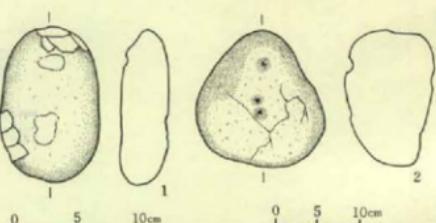
1 は、凹石であるが、一部に敲打が認められる。

2 は、多孔石で、火受けをしている。



1 層 暗褐色土 ローム質土。
2 層 暗褐色土 ローム質土。
1 層より明るい。
3 層 黄褐色土 堅致。

第107図 山神 2 号集石



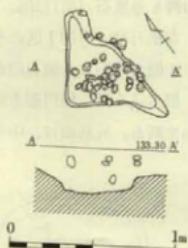
第108図 山神 2 号集石出土遺物

山神3号集石（第109図、PL-15）

本集石は、山神I区の東部（Ch-20G）に位置する。

約40個の小円礫で構成される。

掘り込みは明確でなく、不整形を呈する。覆土は、ローム質の暗褐色砂質土である。



第109図 山神3号集石

山神4号集石（第110図、PL-15）

本集石は、山神I区の中央部（Ci-22G）に位置するが、調査区外に延びる。

12個の円礫により構成される。礫には、一部火受けが認められ、亀裂を生じている。

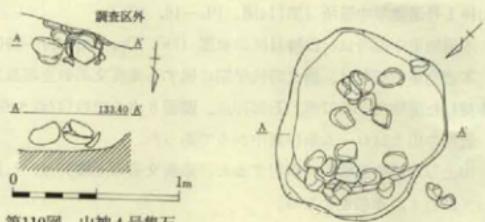
掘り込みは確認できなかった。

山神5号集石（第111図、PL-15）

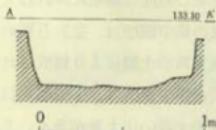
本集石は、山神I区の西部（Ci-24G）に位置し、6号集石と隣合う。

19個の円礫により構成され、礫の一部には火受けが認められる。

掘り込みは、明確でなかったが円形を呈し、直径96.0cmを測る。壁はほぼ垂直な立ち上がりで、壁高22.5~31.5cmを測る。坑底面は、やや凸凹である。



第110図 山神4号集石



第111図 山神5号集石

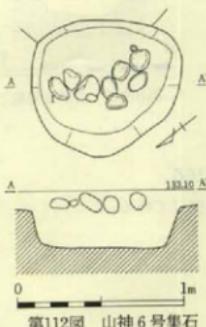
IV 検出した遺構と遺物

山神 6 号集石 (第112図、PL-15)

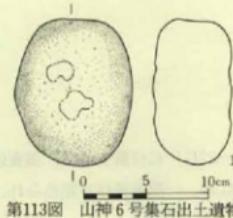
本集石は、山神 I 区の西部 (Ci-24G) に位置し、5号集石と隣合い、5号住居址に切られる。

1 個の凹石と 9 個の円礫により構成される。礫には明確な火受けは認められなかった。

掘り込みは、梢円形を呈し長径 90.0cm、短径 81.0cm を測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高 39.0 cm を測る。坑底面は、中央部が若干高い。



第112図 山神 6号集石



第113図 山神 6号集石出土遺物

山神 6号集石出土遺物 (第113図、第44表)

凹面を 2 面有する凹石である。

山神 1号遺物集中箇所 (第114図、PL-16, 17)

本遺物集中箇所は、山神 II 区の東部 (Do, Dp, Dq-17~20G) に位置する。

本遺物集中箇所は、縄文時代早期に属する条痕文系の土器及び石器・礫器から構成され、出土地点を実測した遺物は土器 57 点、石器 79 点、礫器 6 点の総数 142 点からなる。

遺物の出土はローム漸移層中からであった。

出土した遺物を細かく検討すると、条痕文系の土器 57 点、石器 3 点、石錐 2 点、削器・搔器 12 点、凹石・磨石 4 点その他となる。

分布の範囲は厳密にみれば大きく 2 箇所に分けられる。

東の集中箇所は、完形石器の出土量は、多くないものの、剝片が多く出土しており、これらの剝片と条痕文系の土器により構成される。これらの剝片に接合関係はみられなかった。

西の集中箇所は、中央部を 11 号住居址によって切られ、判然としないが、東の集中箇所に比して条痕文系の土器の出土量が多く、これらの土器と礫・礫器を中心とした遺物構成を示す。礫には、火受けの状況は認められず、この点からも 2 号遺物集中箇所との相違が指摘できる。

Dp-20G⁺



第114図 山神1号遺物集中箇所

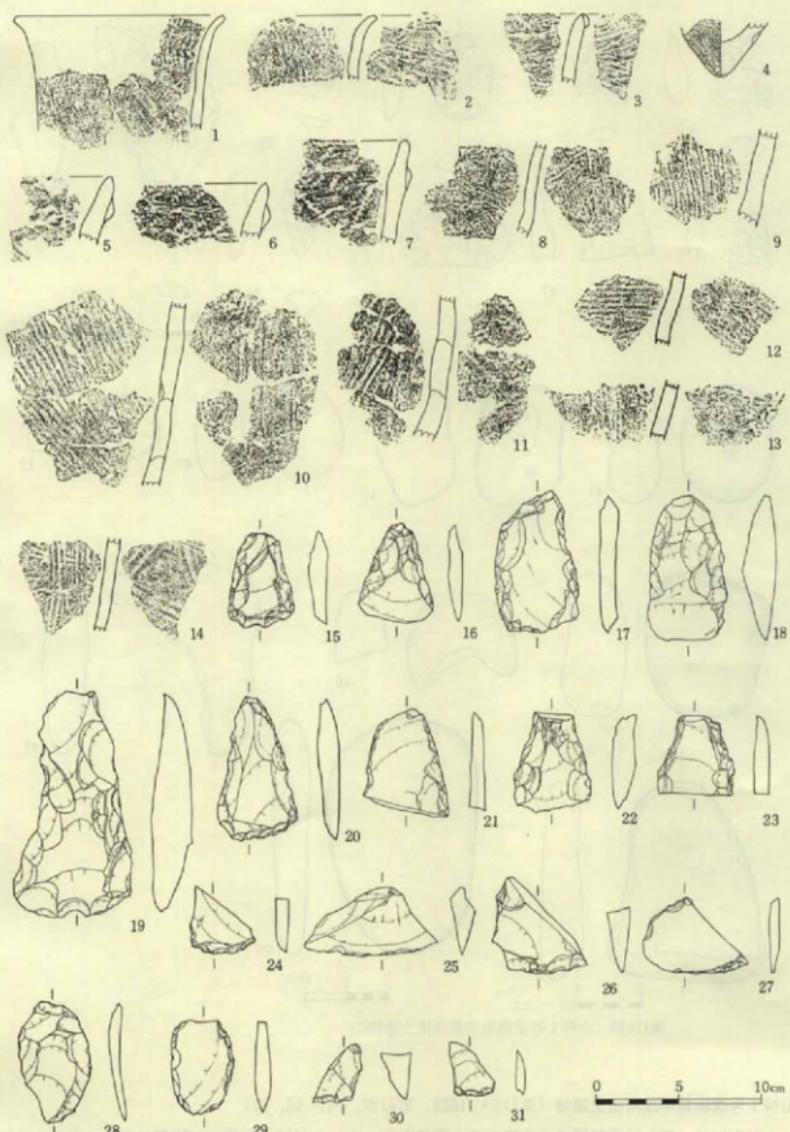
土器
石器



Dp-18G⁺

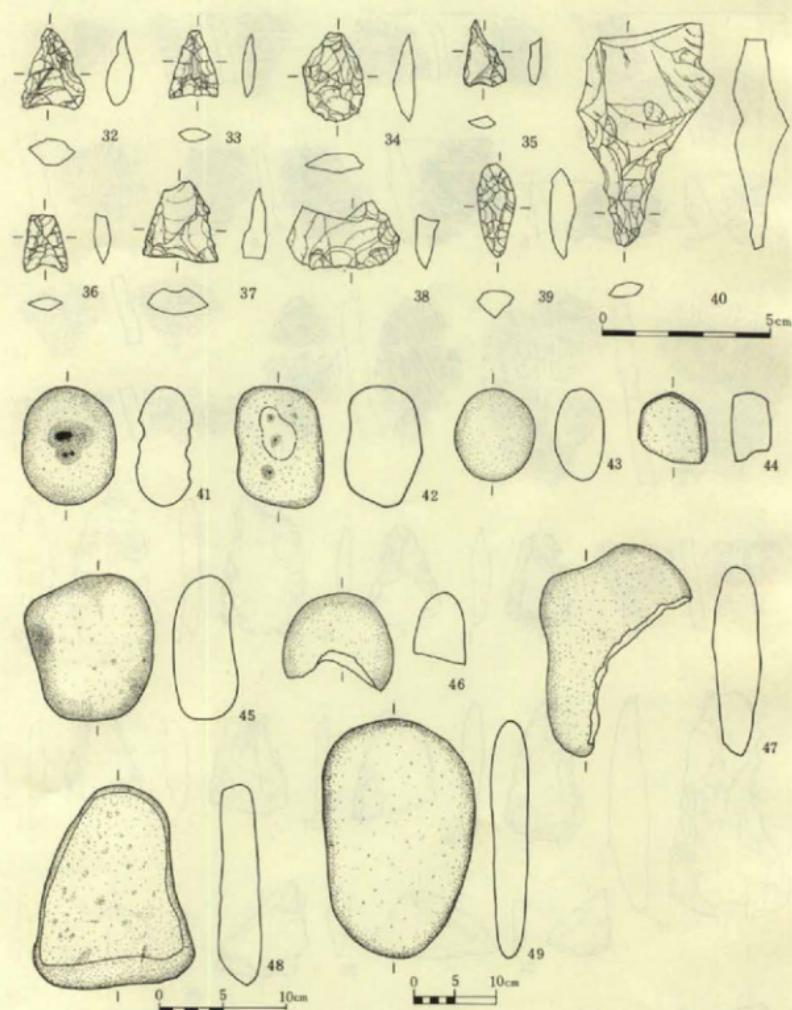


Dp-17G⁺



第115図 山神1号遺物集中箇所出土遺物(1)

IV 検出した遺構と遺物



第116図 山神1号遺物集中箇所出土遺物(2)

山神1号遺物集中箇所出土遺物（第115・116図、第45表、PL-66, 67）

1から14は、縄文時代早期の条痕文系の土器である。1・2は同一個体で口唇部に向かい大きく外反する口縁を持つ。3は、口唇部に折り返しがみられ肥厚する。4は、尖底部分である。5から7は、隆

帶の添付がみられる口縁部の破片資料で縦条体の圧痕が認められる。8から14は、いずれも胴部の破片資料で表裏に条痕が認められる。

15から23は、打製石斧である。16・18は刃部が鋭角で使用痕が認められる。

24から31は、削器・搔器である。

32から38は、石錐である。

39・40は、石錐である。

41から46は、磨石・凹石である。

47から49は、台石である。

山神2号遺物集中箇所

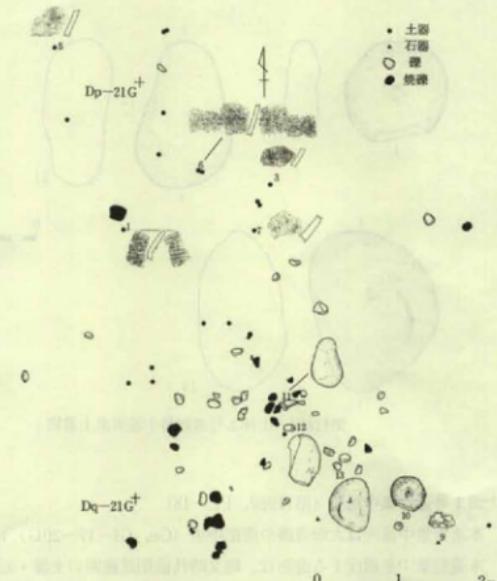
(第117図、PL-17)

本遺物集中箇所は、山神I区の中央東より(Do, Dp, Dq-20, 21 G)に位置する。

本遺物集中箇所は、縄文時代早期に属する条痕文系の土器及び石器・礫器から構成され、出土地点を実測した遺物は土器20点、石器2点、礫器4点、焼礫23点、礫31点の总数80点からなる。

出土した遺物を詳細に検討すると、条痕文系の土器20点、削器・搔器2点、凹石・磨石4点、焼礫23点、その他礫等であり、明らかに1号遺物集中箇所とは異なった遺物構成を示す。特に焼礫23点の出土は、その性格を考察するうえで注意を要する。分布には、これらの焼礫が集石炉として利用されていた状況を直截的に示すもので

はないが、本調査区での耕作は、本遺物集中箇所の確認面まで及んでおり、遺物も移動した可能性を考慮し、集石炉等にかかる遺構であった可能性が高い。



第117図 山神2号遺物集中箇所

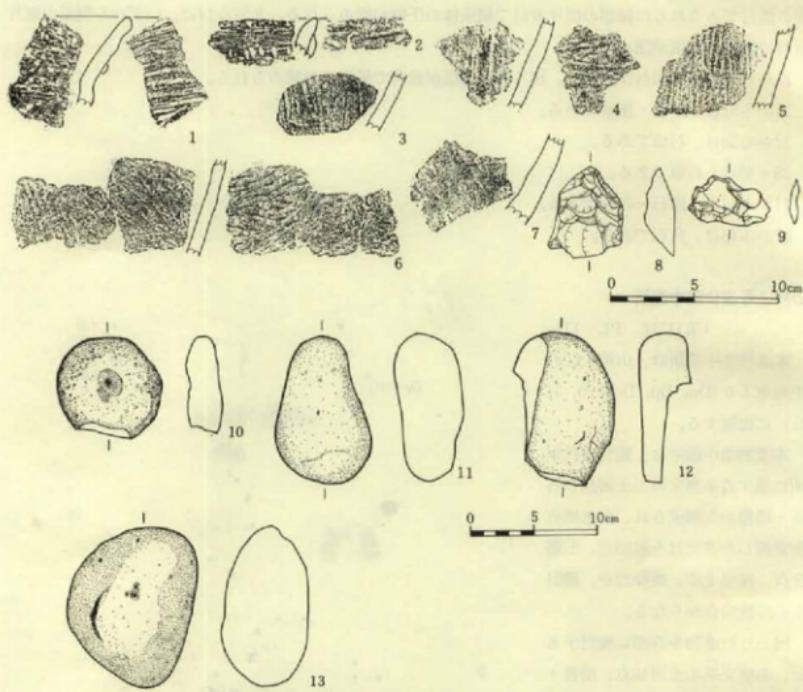
山神2号遺物集中箇所出土遺物 (第118図、第46表、PL-68)

1から7は、縄文時代早期に属する条痕文系の土器でいずれも表裏に条痕が認められる。

8・9は、削器・搔器である。

10から13は、凹石・磨石である。

IV 検出した遺構と遺物



第118図 山神2号遺物集中箇所出土物

大畑1号遺物集中箇所（第119図、PL-18）

本遺物集中箇所は大畑遺跡の南部中央（Ge, Gf-17~20G）に位置する。

本遺物集中を構成する遺物は、縄文時代前期諸磯期の土器・石器・礫・焼砾からなり、出土地点を実測した遺物は、土器272点、石器（礫器も含む）16点、礫104点、焼砾14点の総数406点である。

遺物の出土の特徴として、構成遺物のうち縄文土器片を主とする分布の中心は西北部にある。また、礫を主体とする分布の中心は、南東部にある。また、焼砾の分布に偏在性は認められない。

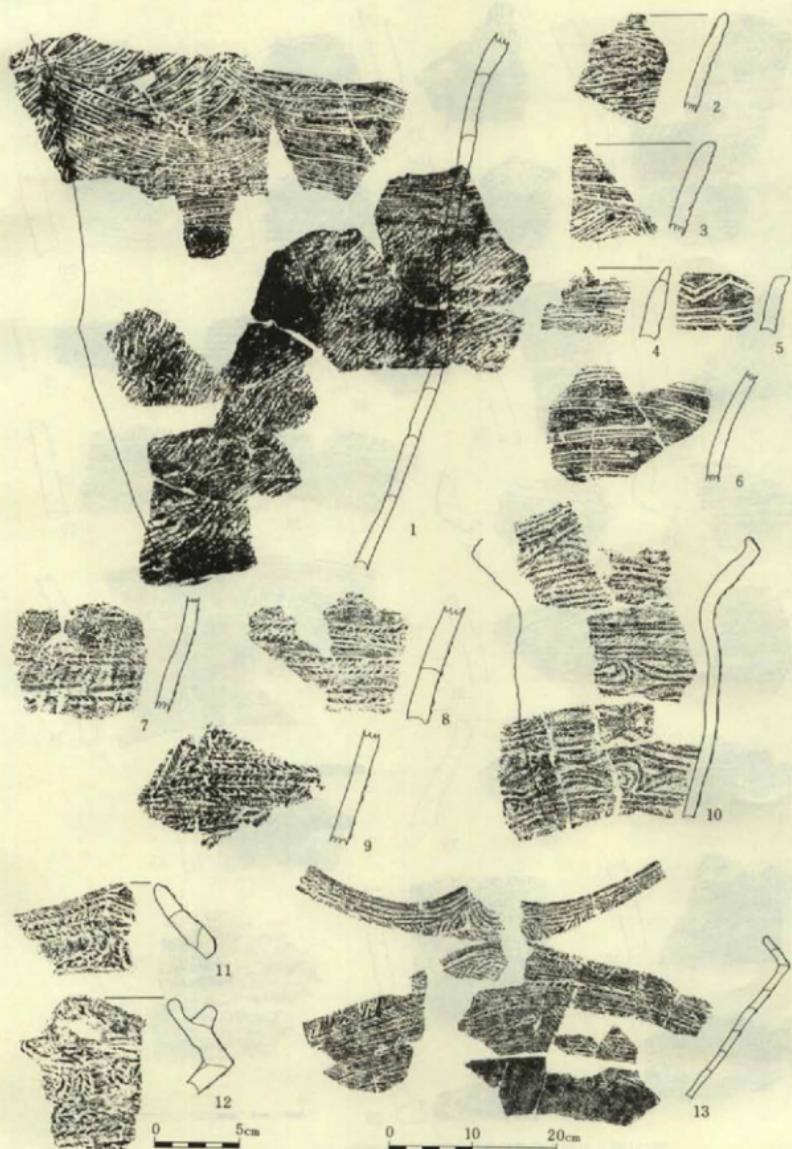
1の縄文土器・深鉢は遺物集中箇所の南部からまとまって出土している。

13の縄文土器・深鉢は遺物集中箇所の東の外れでまとめて出土している。

出土した縄文土器は、すべて前期諸磯b式期の範疇に入るものである。

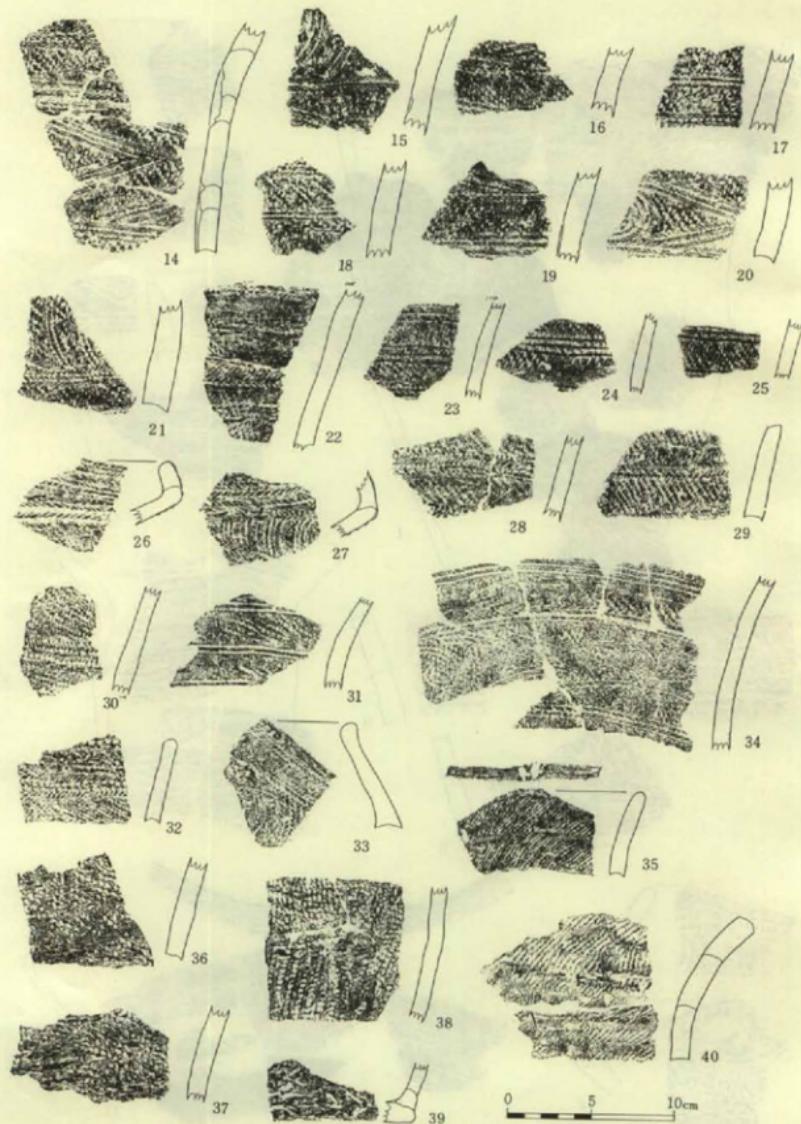


第119図 大烟 1号遺物集中箇所

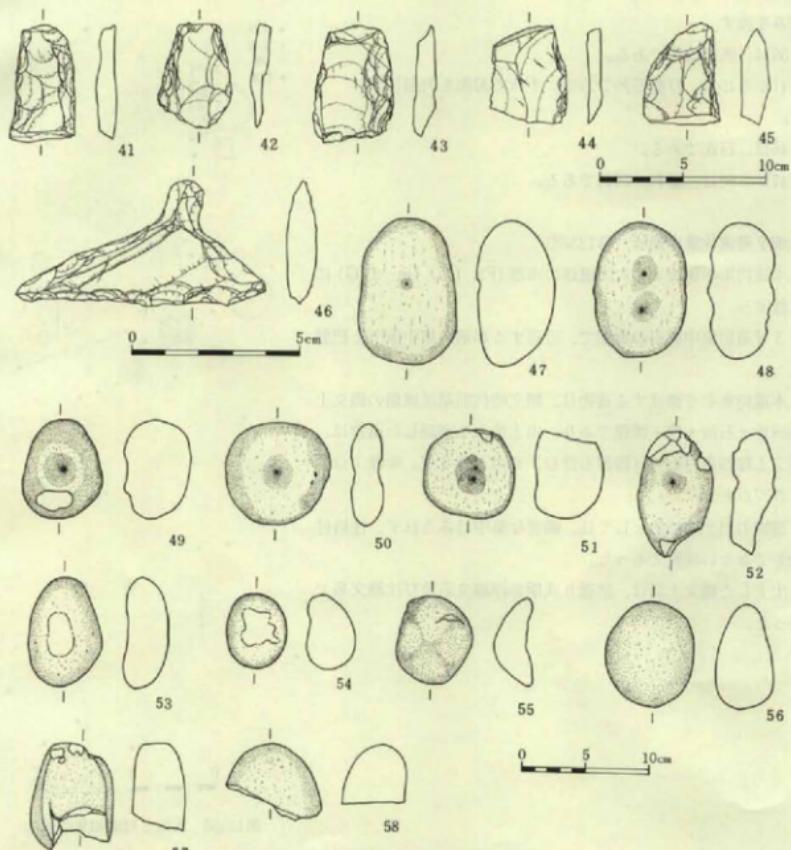


第120图 大烟1号遺物集中箇所出土遺物(1)

IV 検出した遺構と遺物



第121図 大畑1号遺物集中箇所出土遺物(2)



第122図 大畠1号遺物集中箇所出土遺物(3)

大畠1号遺物集中箇所出土遺物 (第120~122図、PL-69, 70)

1は、頸部でくの字に屈曲し、口縁に向かって外反気味に開き集合沈線を施す深鉢。

2から6は、沈線文系の土器で、2から4は、口縁部の破片である。

7から33は、浮線文系の土器である。10は、頸部でくの字に屈曲し、口縁部に向かい内湾するキャリバー形の深鉢で浮線文により平行文・溝巻き文を構成する。13は、大きく外傾する口縁から口唇部に向かってくの字に屈曲する深鉢で、口縁は波状を呈する。器面は、浮線文によって平行文及び溝巻き文を構成する。11・12も胎土等から13と同一個体である可能性がある。

35から38・40は繩文系の土器である。35は、波状を呈する口縁を持つ深鉢の口縁部破片で、波頂部に

IV 検出した遺構と遺物

刻みを施す。

39は、底部破片である。

41から45は、打製石斧である。すべて刃部を欠損している。

46は、石匙である。

47から58は、磨石・凹石である。

大畠 2号遺物集中箇所（第123図）

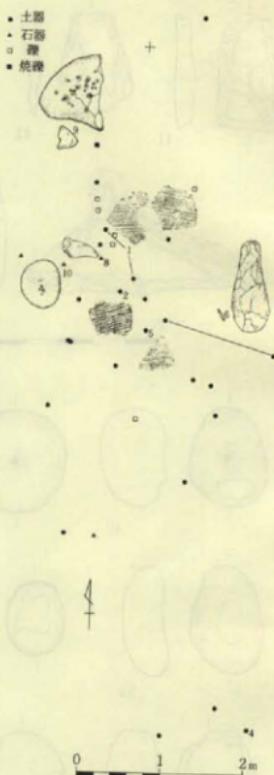
本遺物集中箇所は、大畠遺跡の南部（Ft, Ga, Gb—17G）に位置する。

3号遺物集中箇所の南部で、近接するが別の集中箇所と把握した。

本遺物集中を構成する遺物は、縄文時代前期諸窯期の縄文土器破片・石器・礫・焼跡であり、出土地点を実測した遺物は、縄文土器25点、石器（礫器も含む）6点、礫5点、焼跡1点の総数37点と少ない。

遺物の出土の特徴としては、顯著な集中はみられず、性格付けもできない状況であった。

出土した縄文土器は、諸磯b式期の浮線文系及び沈線文系であった。



第123図 大畠 2号遺物集中箇所

大畠 2号遺物集中箇所出土遺物（第124図、第48表、PL-71）

1から5は、縄文土器の破片である。

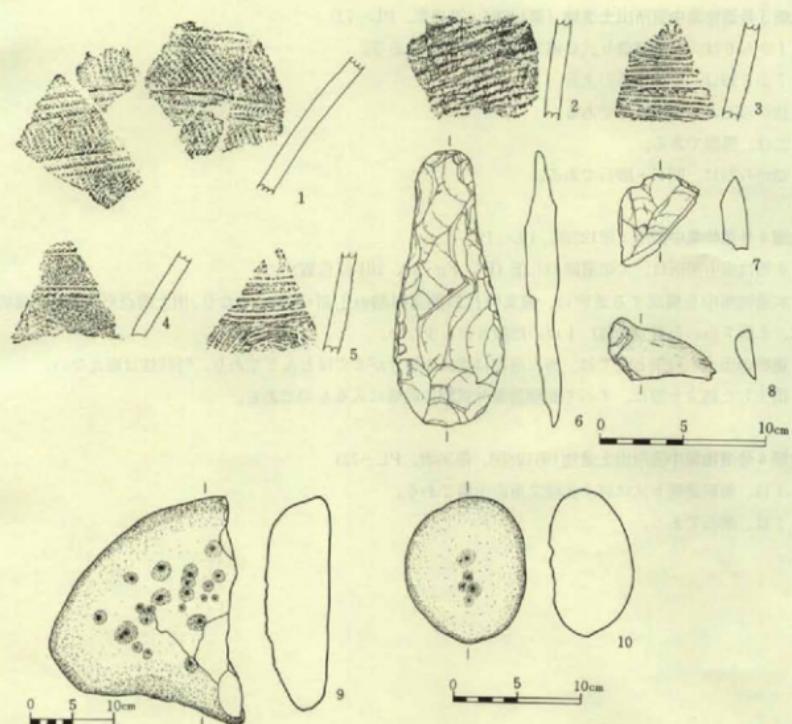
6は、打製石斧で、刃部には、使用痕が認められる。

7は、打製石斧の基部破片である。

8は、振器である。

9, 10は、多孔石である。

（以下は、第48表の記述による）
11は、打製石斧で、刃部には、使用痕が認められる。
12は、打製石斧の基部破片である。
13は、振器である。
14は、多孔石である。
15は、打製石斧で、刃部には、使用痕が認められる。
16は、打製石斧の基部破片である。
17は、振器である。
18は、多孔石である。
19は、打製石斧で、刃部には、使用痕が認められる。
20は、打製石斧の基部破片である。
21は、振器である。
22は、多孔石である。
23は、打製石斧で、刃部には、使用痕が認められる。
24は、打製石斧の基部破片である。
25は、振器である。
26は、多孔石である。



第124図 大畑2号遺物集中箇所出土遺物

大畑3号遺物集中箇所（第125図、PL-19）

本遺物集中箇所は、大畑遺跡の南部（Fp～Ft-17, 18）に位置する。

本遺物集中を構成する遺物は、繩文時代前期諸磯期の土器・石器・礫・焼跡からなり、出土地点を実測した遺物は、土器100点、石器（礫器も含む）9点、礫27点、焼跡7点の総数143点である。

遺物の出土の特徴としては、その遺物分布の中心がFs-16, 17Gにあり、この集中に比して他の遺物密度は低い。構成遺物は繩文土器片が主であり、他の遺物に構成要素としての特殊性は窺えない。

出土した繩文土器は、すべて前期諸磯b式期の範疇に入るもので、浮線文系及び繩文系がほとんどであった。この点は、1号遺物集中箇所、2号遺物集中箇所、4号遺物集中箇所に沈線文系の土器が出土しているのとは大きく相違する。

IV 検出した遺構と遺物

大烟 3 号遺物集中箇所出土遺物 (第126図、第49表、PL-72)

1から6は、前期諸磯b式に属す細文系の土器である。

7から19は、浮線文系の土器。

20から21は、打膠石斧である。

22は、攝置である。

23から29は、凹石・磨石である。

大畠 4 号遺物集中箇所 (第127図、Pl. - 19)

本遺物集中箇所は、大畠遺跡の北部 (Ff, Fg-19, 20) に位置する。

本遺物集中を構成する遺物は、縄文時代前期諸磯期の土器・石器からなり、出土地点を実測した遺物は、土器7点、石器（礫器）1点の総数8点と少ない。

遺物の出土の特徴としては、構成遺物は縄文土器片がそのほとんどであり、特殊性は窺えない。

出土した縄文土器は、すべて前期諸磯山式期の範疇に入るものである。

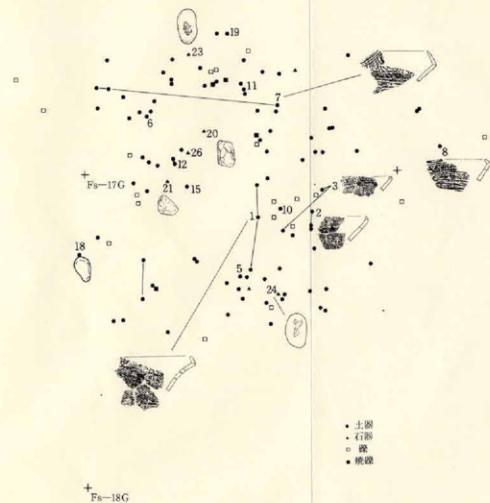
大烟4号遺物集中簡所出土遺物(第128圖、第50表、PI-73)

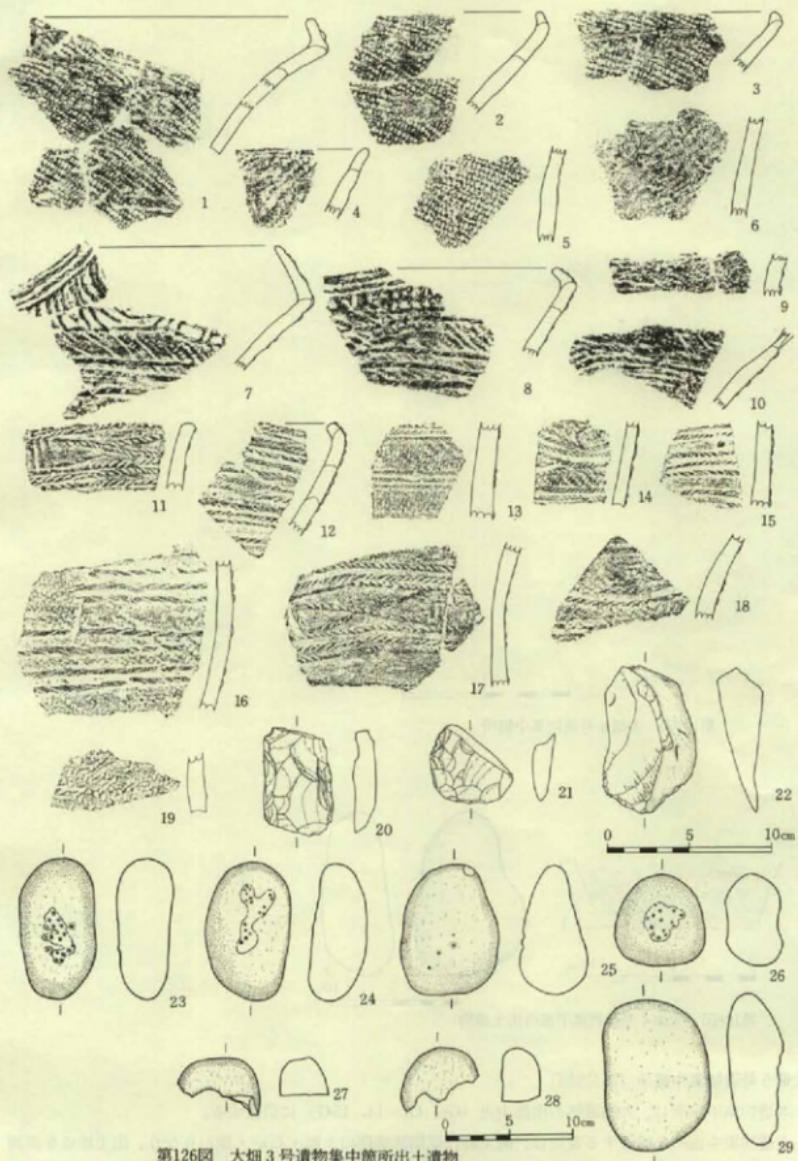
1は、前期諸磯山式に属す沈縫文系の土器である。

2は、磨石である。



第125図 大烟3号遺物集中箇所

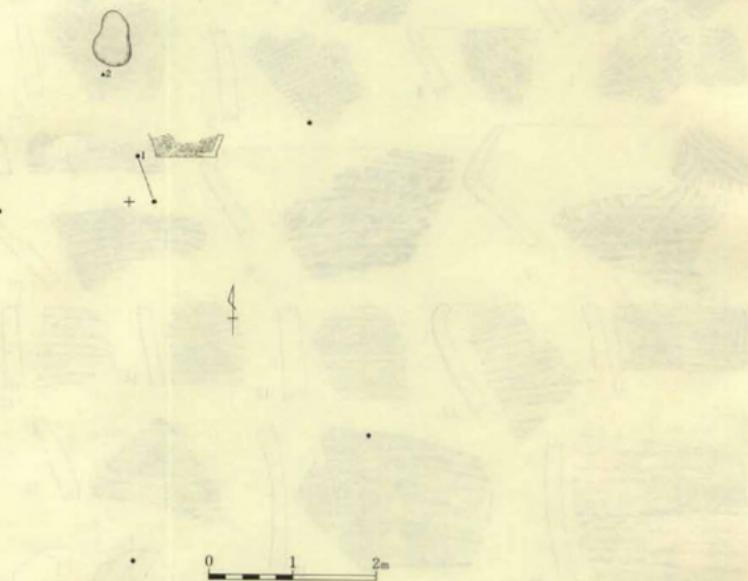




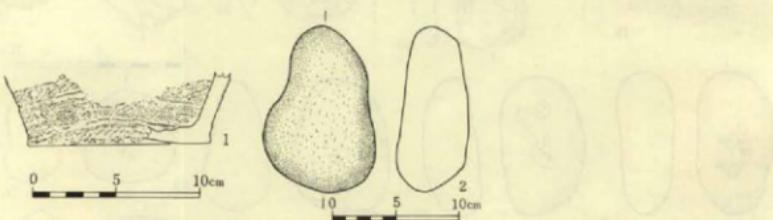
第126図 大畠3号遺物集中箇所出土遺物

IV 検出した遺構と遺物

● 土器
● 石器



第127図 大畑 4号 遺物集中箇所

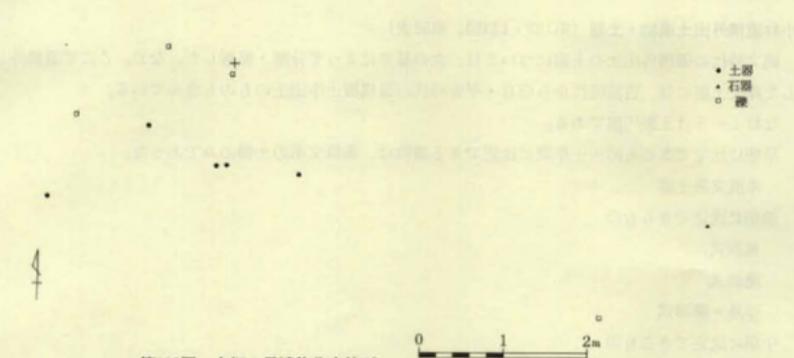


第128図 大畑 4号 遺物集中箇所出土遺物

大畑 5号 遺物集中箇所 (第129図)

本遺物集中箇所は、大畑遺跡の南部中央 (Ge, Gf-14, 15G) に位置する。

本遺物集中箇所を構成する遺物は、縄文時代前期諸磯期の土器・石器・礫からなり、出土地点を実測した遺物は、土器 5 点、石器 1 点、礫 4 点の総数10点と少ない。



第129図 大畑 5号遺物集中箇所

遺物の出土の特徴としての特殊性
は窺えない。

出土した縄文土器は、すべて前期
諸磯 b 式期の範疇に入るものであ
る。

大畑 6号遺物集中箇所（第130図）

本遺物集中箇所は、大畑遺跡の南
東部 (Gf, Gg-5 ~ 7 G) に位置す
る。

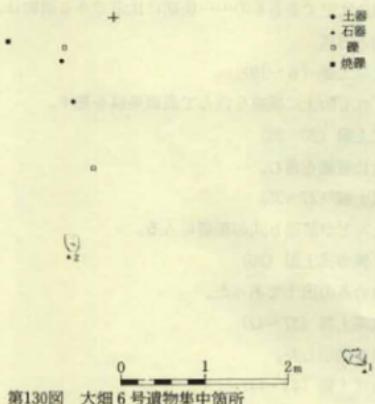
本遺物集中箇所を構成する遺物
は、縄文時代前期諸磯期の土器・石
器・礎・焼跡からなり、出土地点を
実測した遺物は、土器 5 点、石器(礎
器) 2 点、礎 2 点、焼跡 1 点の総数
10 点と少ない。

大畑 6号遺物集中箇所出土遺物

(第131図、第51表、PL-73)

1 は、搔器である。

2 は、凹石である。



第130図 大畑 6号遺物集中箇所



第131図 大畑 6号遺物集中箇所出土遺物

IV 検出した遺構と遺物

小林遺構出土遺物・土器 (第132・133図、第52表)

縄文時代の遺構出土土器については、次の基準によって分類・整理した。なお、ここで遺構外とした縄文土器には、古墳時代から奈良・平安時代の遺構覆土中出土のものも含んでいる。

なお1~5は土製円盤である。

早期に比定できるもの……早期に比定できる遺物は、条痕文系の土器のみであった。

条痕文系土器

前期に比定できるもの

黒浜式

諸磯式

浮島・興津式

中期に比定できるもの

勝坂式系

阿玉台式系

加曾利E式

その他 燃町タイプほか

後期に比定できるもの……後期に比定できる遺物は、堀之内式のみであった。

堀之内式

条痕文系土器 (6~19)

いずれも胎土に纖維を含んで表裏条痕を施す。

黒浜式土器 (20~26)

胎土に纖維を含む。

諸磯式土器 (27~35)

ほとんどが諸磯b式の範疇に入る。

浮島・興津式土器 (36)

1点のみの出土であった。

勝坂式系土器 (37~42)

6点を図示した。

阿玉台式土器 (43~44)

2点を図示した。

燃町タイプ (45~49)

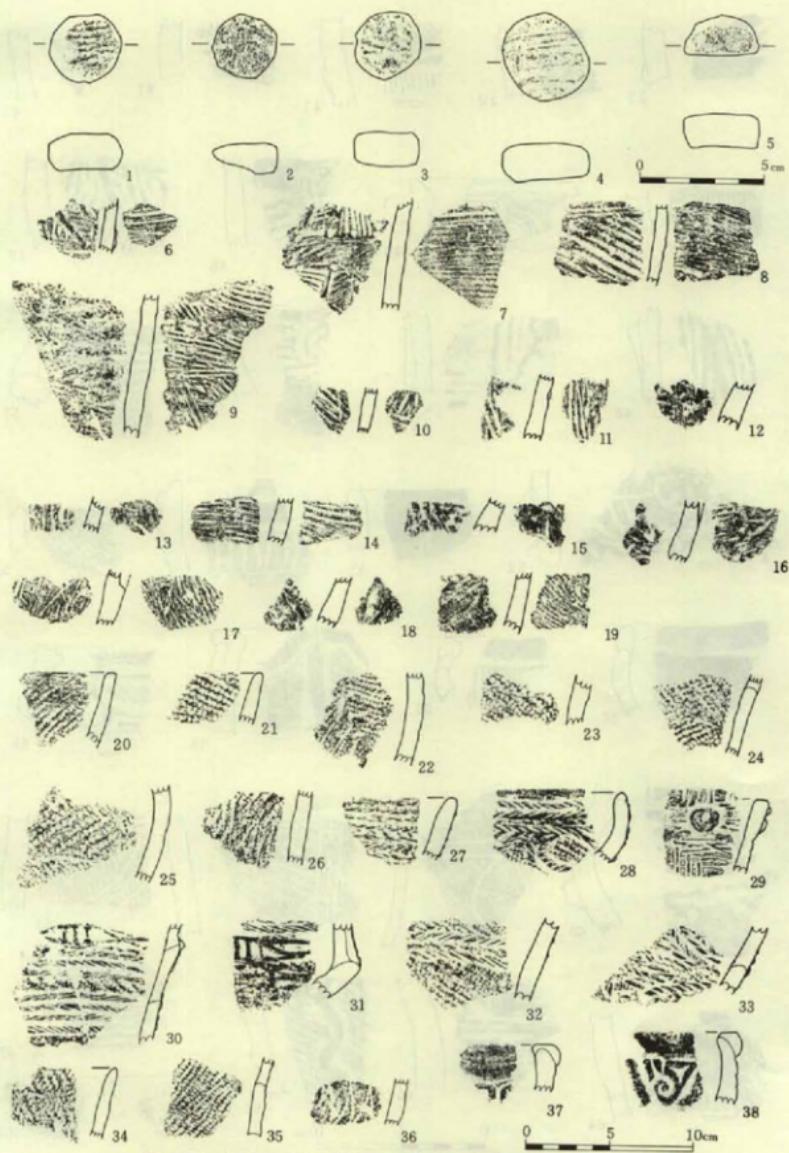
5点を図示した。

加曾利E式土器 (50~67)

出土量はいちばん多い。

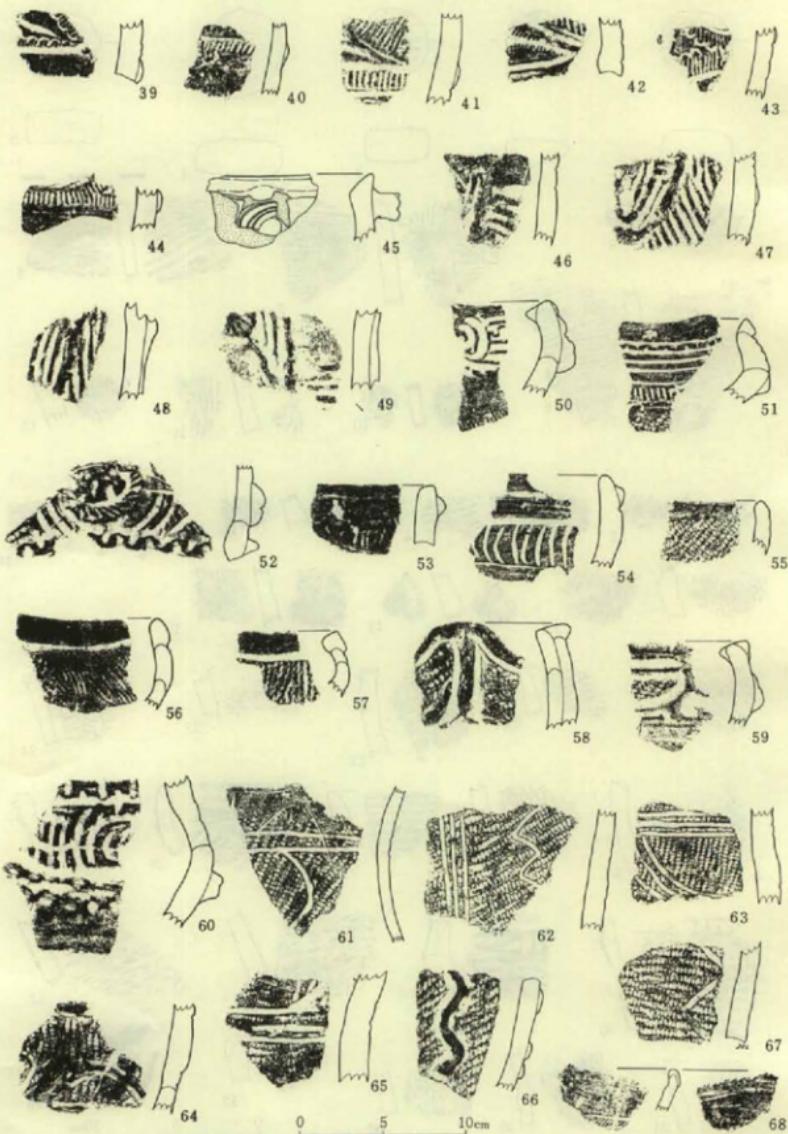
堀之内式土器 (68)

1点のみの出土であった。

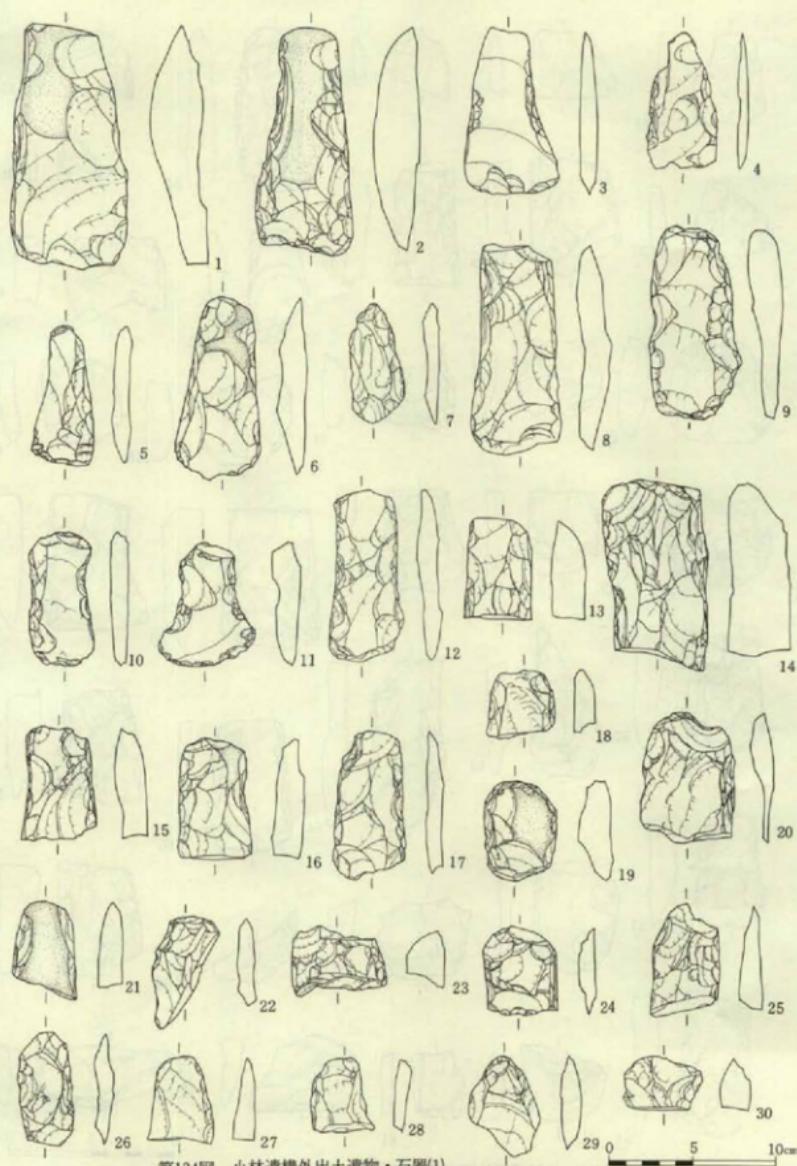


第132図 小林遺構出土土器(1)

IV 検出した遺構と遺物

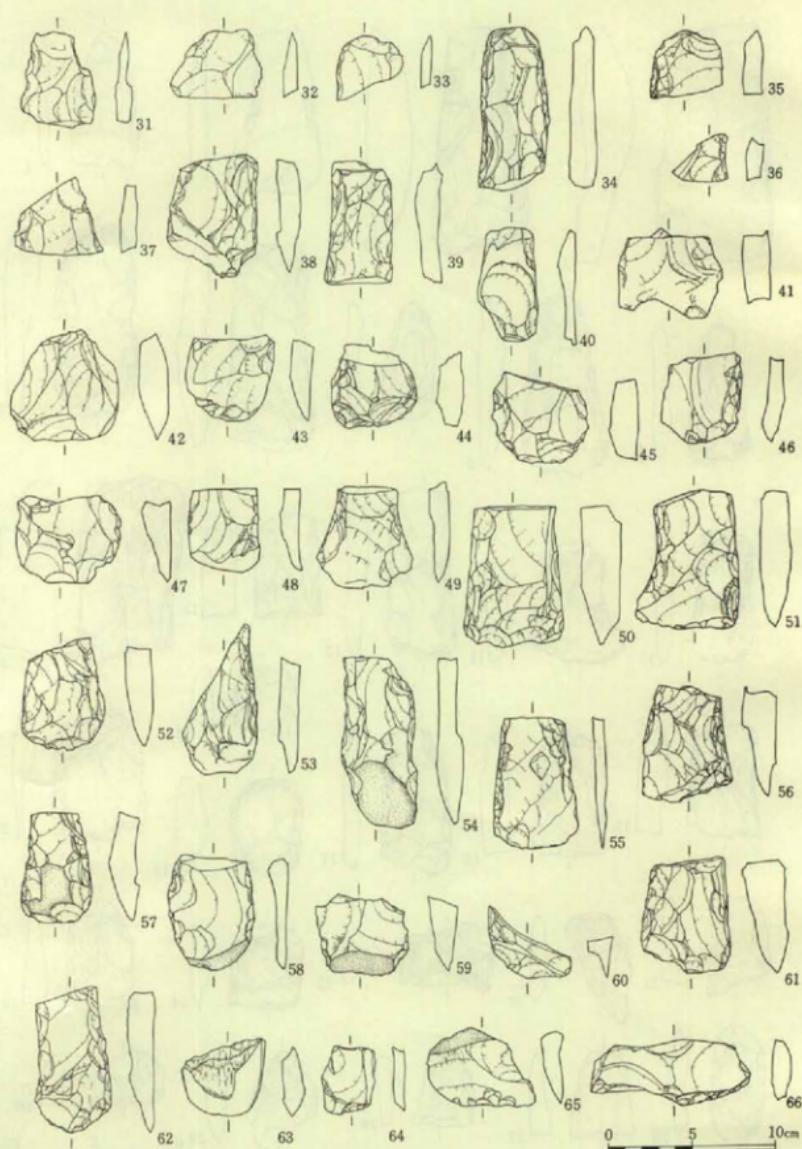


第133図 小林遺構外出土遺物・土器(2)

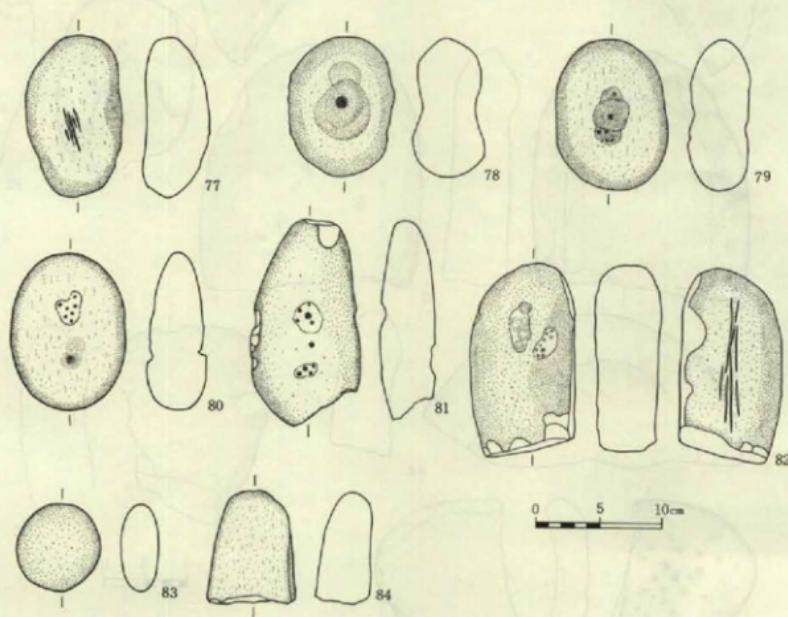
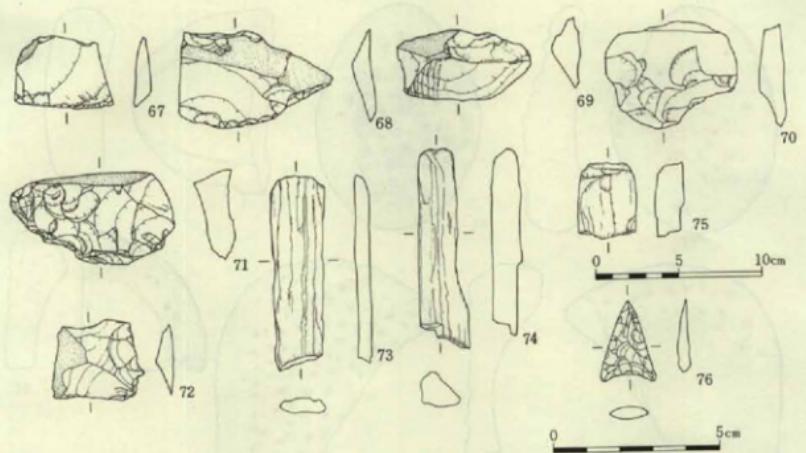


第134図 小林遺構外出土遺物・石器(1)

IV 検出した遺構と遺物

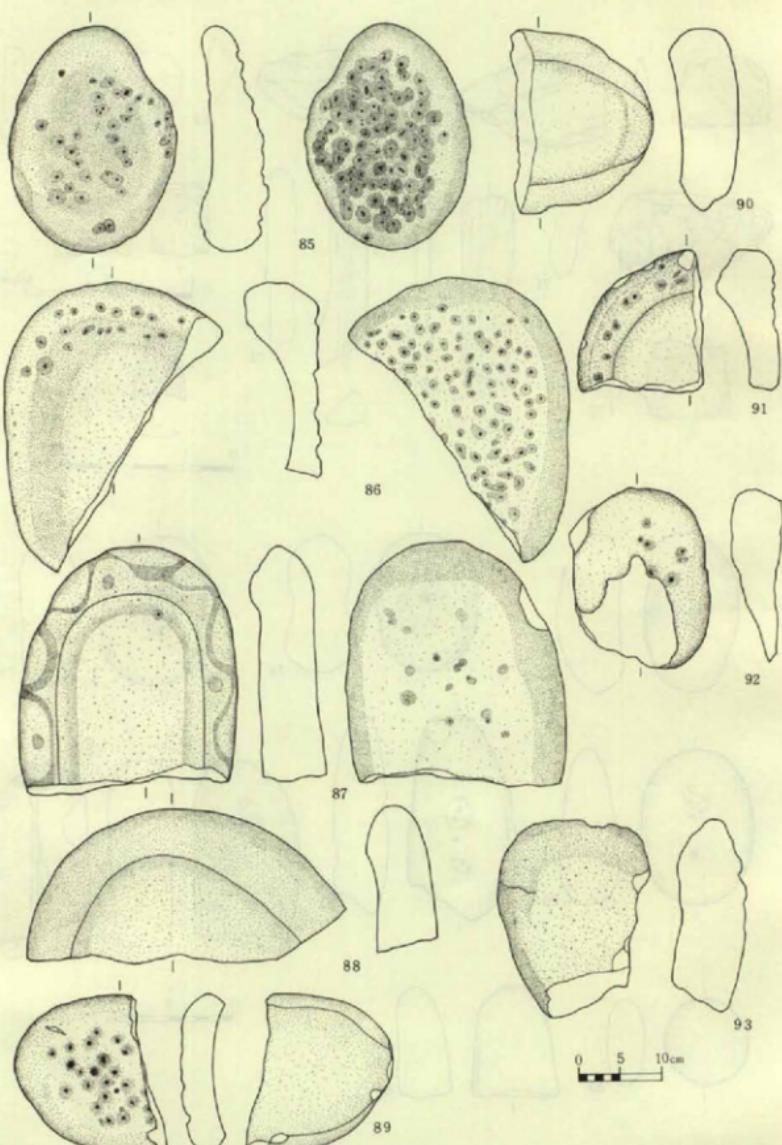


第135図 小林遺構外出土遺物・石器(2)

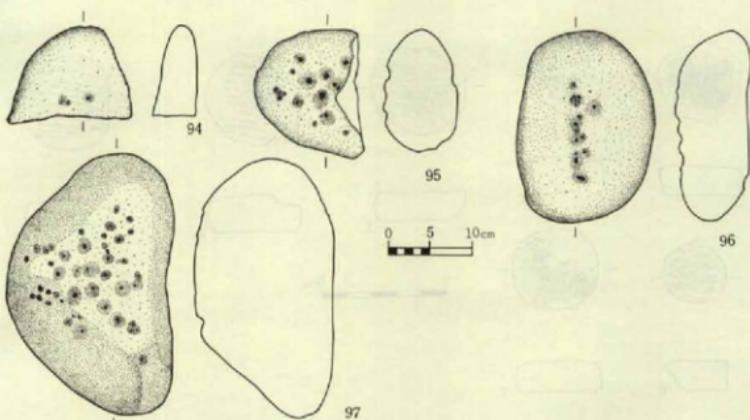


第136図 小林遺構外出土遺物・石器(3)

IV 検出した遺構と遺物



第137図 小林遺構出土遺物・石器(4)



第138図 小林遺構外出土遺物・石器(5)

小林遺構外出土遺物・石器（第134～138図、第53表、PL-74～76）

1から62は、打製石斧である。63は、磨製石斧である。

64から72は、搔器・削器である。73から75は、棒状石器である。

76は、石鏃である。

77から84は、凹石・磨石である。85から93は、石皿である。94から97は、多孔石である。

山神遺構外出土遺物・土器（第139図、第54表）

分類・整理の基準は、小林遺跡と同じである。1～7は土製円盤である。

条痕文系土器（8）

いざれも胎土に纖維を含んで表裏条痕を施す。

黒浜式土器（9～15）

胎土に纖維を含む。

諸磯式土器（16～20）

ほとんどが諸磯式の範疇に入る。

勝坂式土器（21）

1点を図示した。

阿玉台式土器（22）

1点を図示した。

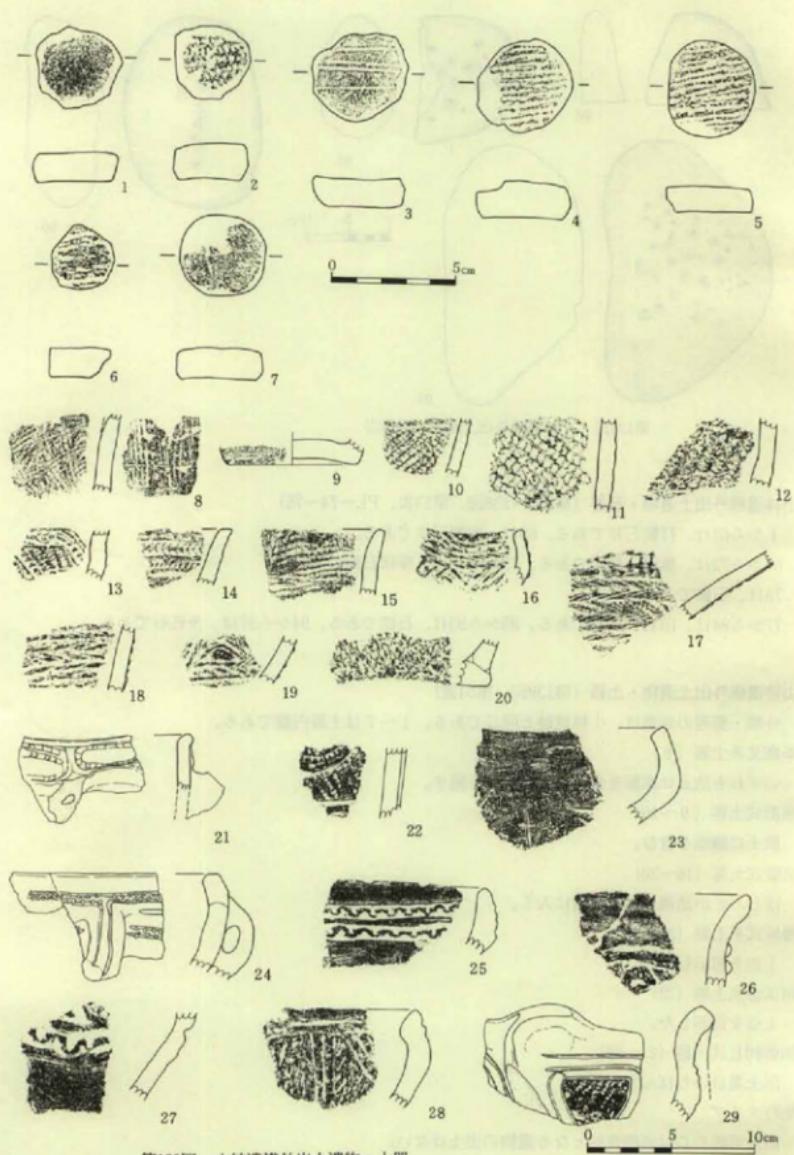
加曾利E式土器（23～29）

出土量はいちばん多い。

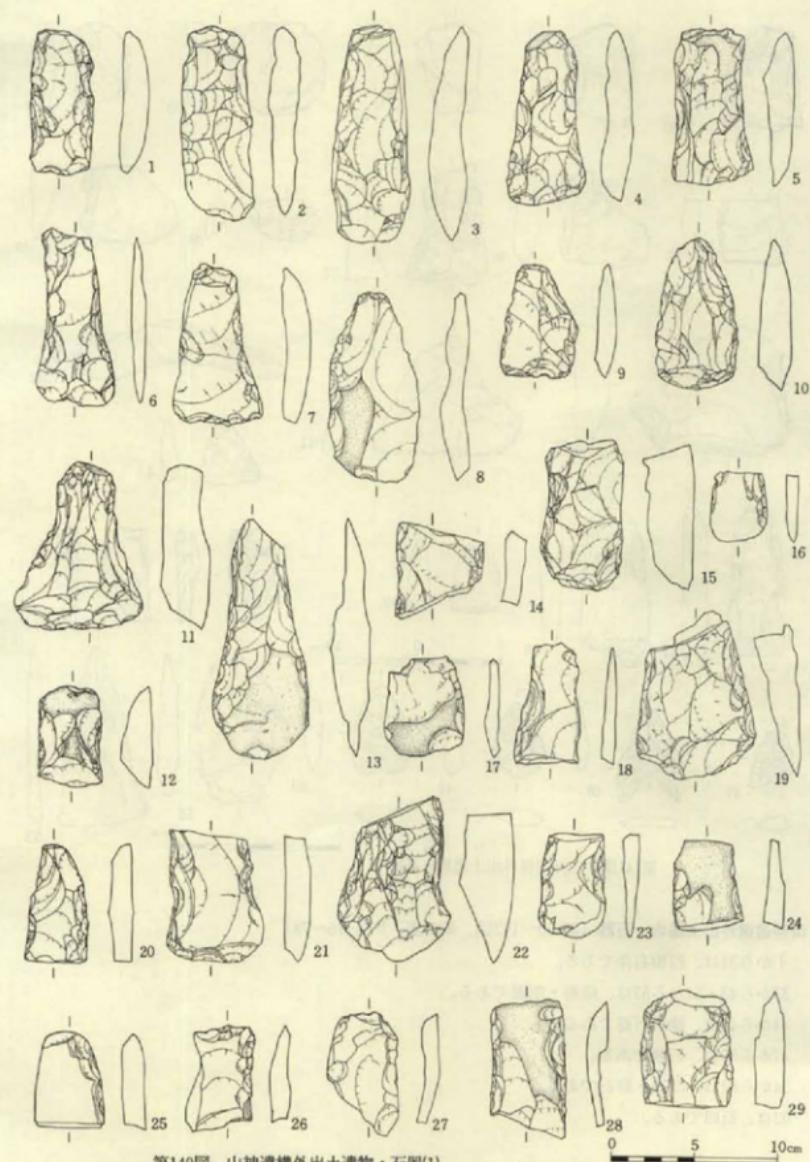
焼町タイプ

山神遺跡からは実測資料となる遺物の出土はない。

IV 検出した遺構と遺物

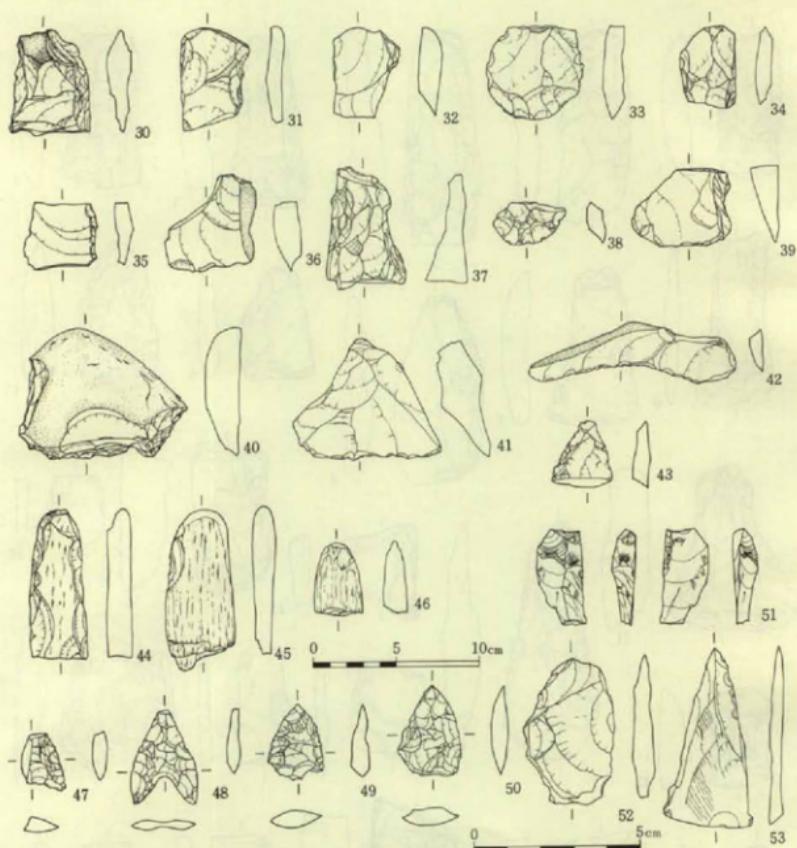


第139図 山神遺構外出土遺物・土器



第140図 山神遺構外出土遺物・石器(1)

IV 検出した遺構と遺物



第141図 山神遺構外出土遺物・石器(2)

山神遺構外出土遺物・石器 (第140~142図、第55表、PL-76~78)

1から34は、打製石斧である。

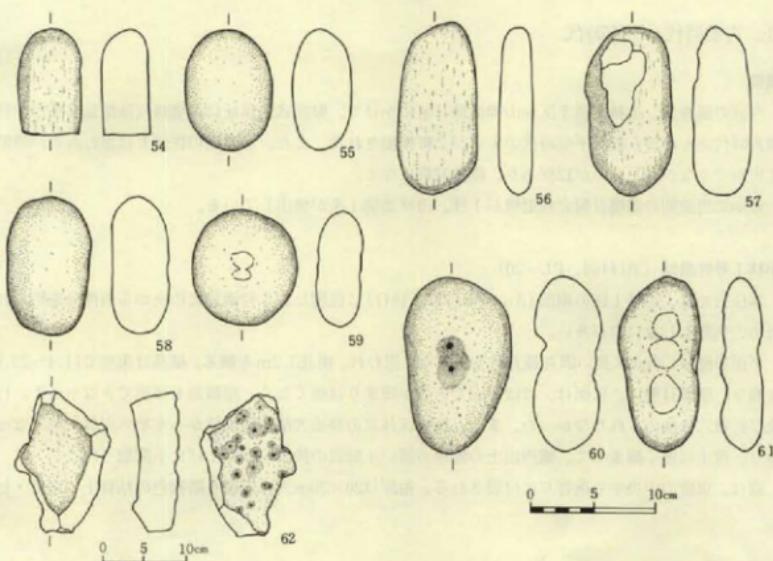
35から43・51から53は、搔器・削器である。

44から46は、棒状石器である。

47から50は、石鎌である。

54から61は、凹石・磨石である。

62は、石皿である。



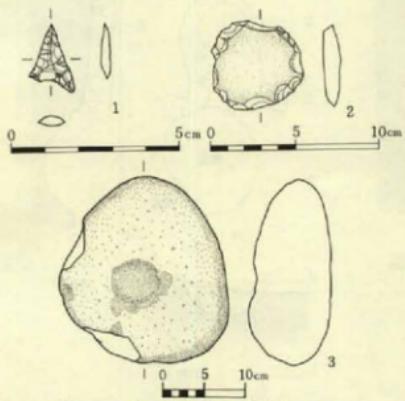
第142図 山神遺構外出土遺物・石器(3)

大畠遺構外出土遺物・石器 (第143図、第56表)

1は、石錐である。

2は、円形插器である。

3は、多孔石である。



第143図 大畠遺構外出土遺物・石器